炎の支配者　フレイムマスター

陰島徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎の支配者　フレイムマスター

【Ｎコード】

Ｎ５８７５Ａ

【作者名】

陰島徹

【あらすじ】

炎の支配者（フレイムマスター）の花梨と、炎の守護者（フレイムガーディアン）の弾。二人の出会いはあまりに唐突で、しかも異常なものだった。

第一話：プロローグ：失敗（前書き）

一部の小説と似ている、とよく言われてしまいますが、決して真似をしようとして書いたわけではありません。ご了承下さい。

第一話：プロローグ：失敗

闇が少女を飲み込んでいく。
その近くには、少女を護らねばならなかった少年が一人。
しかし少年は、闇との戦いに破れ意識を失いかけていた。
（奪われてしまう）
そんな悔しさと、使命を果たせなかった不甲斐ない自分に対する怒り。
それを胸の内で感じつつ、少年の意識は闇へと落ちていく…。
意識が闇へと落ちる直前。
耳に入ったのは少女の叫び声。
「弾！………」

目を覚ましたとき、少年はまだ生きている自分に驚いた。
（生きている…いや、生かされているのか…）
お前などはいつでも殺せる。
そう言われているように感じた少年は怒りに身を任せ、
身体中があげている悲鳴を無視して立ち上がる。
（早く〈適合者〉を見つけないと…）
今度こそ使命を果たすため、少年は傷だらけの身体を引きずってその場を後にした。

第一話：第一章：真実

鈴木花梨は高校一年生。
入学当初は殆ど友達がいなかったが、５月に入ってからは友達と呼べる人も増えてきていた。
一人っ子で、母親は自分が５歳の時に死んでいる。
また父親が単身赴任のため、一人暮らし。彼氏は欲しいとは思っているが、まだいない。
学校では明るくて元気な子と思われていて、成績は中の下。
ある日。
そんな彼女が学校へと向かう途中。
１０Ｍ程先を彼女の方へと歩いてくる異様な少年を見た。
綺麗に整っている顔立ち。自分とあまり変わらないくらいの小柄な少年。
それだけの少年ならば、探せばすぐ見つかりそうなのだが―
異様なのは、着ている服の所々が裂けており、全身が血まみれという点だった。
普通の人間ならば、死んでいてもおかしくない程の出血。
それにも拘わらず、しっかりとした足取りで歩いてくる少年。
異常な光景を見た花梨は、悲鳴をあげてその場から離れようとしたのだが、
その少年から滲み出るような雰囲気と恐怖がそれをさせてくれない。
「お前…家は近いのか？」
たった数瞬、声変わりしたてのような少年のその言葉が、自分に向けられて発せられたものだと気付くのに要した時間。
しかし、その短い時間の間に少年は目前に迫っていた。
「え…」
突然の質問にうろたえる花梨。
少年はそんな少女を苛立たしげに睨んで、急かすように同じ質問を

する。
「家は近いのか？」
「は…はい」
答えなければ自分の身が危ないと思った花梨は、恐怖で震えている声を何とか搾り出す。
花梨の返答を聞くや否や、少年は態度を一変させ土下座をして一言。
「頼む！俺を少しの間かくまってくれ！」
「……はい？」
普通、初対面の人には言わないような一言を聞いて、驚きを隠せない花梨。
「頼む！極力迷惑はかけないようにする！」
(どうしよう…家に連れてけって言ってるんだよね…子供とはいえ男の人を家に？パパもいないのに？…でも血まみれだし、大怪我してるのかも…それに、変なことするなら、かくまってなんて言わないよね…)
「分かったわ。こっちよ」
考えた末の結論を言って、花梨は家に向かって走り出す。
いきなり走り出した花梨に多少途惑いつつも、少年は花梨を見失わないようについていく。
走り出して3分も経たないうちに、花梨はそれなりに大きい2階建ての家の前で止まった。
「ここか？」
「そうよ。誰かに見られないうちに、早く入って」
家に入ると玄関のドアを閉めて、一息ついていた少年に今まで思っていた質問を投げかける。
「あなた、名前は？血まみれだけど、救急車とか呼ぼうか？っていうかあなたみたいな子供に何があったの？家は？家族は？」
大量に質問されたので少し唖然としつつも、少年は淡々と全ての質問に答えていく。

「名前は木下弾。傷は負っているけど、もう殆ど治りかけだから気にする必要はない。
それと俺はお前が思ってるほど子供じゃない。１８歳だ。
何があったかは知らない方がいいが…一応かくまって貰ってるから、どうしても知りたいなら後で教える。
家はあるがずっと遠い所だ。家族は多分まだ生きてると思う。
それより、風呂貸して貰えるか？この血落としたいからな」
本当かどうか怪しいこと言ってるけど、嘘はついていない。それに、悪い人じゃない。
直感でそう感じた花梨は、とりあえず弾を風呂場に案内し、父親の部屋から服を持ってくる。そして
「服、ここに置いとくから」
とだけ告げて、リビングへと向かった。

リビングで椅子に座り、何となくテレビニュースを見ること十数分。
やって来た弾が父親の服を着ているのを見て、花梨は思わず失笑してしまった。
本人も自覚しているのだろう。顔が真っ赤である。
というのも、花梨の父親は標準より少し大きいくらいの体格なのだが、
弾は花梨が年下と勘違いしてしまう程、小柄なのである。
まだそれだけなら『小柄な男が大きめの服を着てる』くらいに見えるのだが、それに加えて弾は童顔。
それ故に『子供が背伸びしてぶかぶかの大人の服を着てる』というふうに見えてしまう。
ここまで来ると、最初に弾を見た時の『怖い』というイメージは花梨から吹き飛んでいた。
「ふ…服がデカいんだよ！もっと小さいのは無いのか！？」
更に顔を真っ赤にして文句を言う弾に、花梨は吹き出しそうになるのを堪えつつ、テレビを消して言い返す。

「あなたが小さいのよ。それに、男物の服はパパのだけだからそれより小さいサイズのは無いわね…
あ、それよりさ、さっきの続き聞かせてよ」
さっきの続き。その言葉を聞くと、弾は急に真面目な顔になり、花梨の向かい側の椅子に腰をかける。
「先に一つ言っておく。これから話すことは、真実だ…
しかし、殆どの人々は俺の言うことを戯れ言だ、作り話だと言うだろう。それでも聞きたいか？」
「うん」
躊躇わずに頷いた花梨を見て、弾は仕様がないという風に説明を始める。
「この世には、影の世界の住民〈姿無き者（ノンシェイパー）〉という奴らがいる。
こいつらは、全てを〈混沌（カオス）〉に還すことが使命だと思っている」
意味不明の言葉の数々。
確かに殆どの人々は、こんなこと戯れ言だと言うのだろう。
「全てを〈カオス〉に還すためには、〈支配者の魂（マスターソウル）〉を数多く集める必要があるんだが、
俺ら〈守護者（ガーディアン）〉はそれを防ぐために、先に〈支配者（マスター）〉を見つけて護ることが使命だ」
「ち、ちょっと待って」
弾の説明の意味がよく分からなくなってきた花梨は、説明を遮って疑問を口にする。
「ホントに〈ノ…ノ…ノンシーパー〉なんているの？それに、カオスってなによ？
あと、マスターソウルを数多く集める？マスターがいっぱいいたら、マスターにならないじゃない。
大体、なんでガーディアンはノンシーパーの目的の妨害をするの？」
弾は質問ばかりする花梨を物珍しそうに見るが、弾は出された全ての質問に丁寧に答えていく。
「〈ノンシェイパー〉だ。最初の質問の答えは、最初に言っただろ。

全て真実だ…と。

カオスっていうのは『何もない空間』のことだ。水も大地も空気も…光すらない空間だな。

次に、マスターってのは何も世界の支配者ってわけじゃない。

例えば、風の支配者（ウィンドマスター）とか水の支配者（アクアマスター）って感じに、

支配できる物が大雑把に限られている。

これで複数いる理由が判るだろ？ガーディアンがノンシェイパーの妨害をする理由は…判るな？

全てをカオスに還すということは、世界の破滅を意味する。それを防ぐためだ。」

弾は少しだけ—花梨に興味を持っていた。

今まで彼は何度も同じ説明をしてきた。

大抵の人は、この説明をここまで進める前に戯れ言と決めつけ、それを真面目に説明する弾を気違いと判断し、

早々に家を追い出そうとする。

この話が真実と理解した人でも、質問をしてきた人はいなかった。

だが、今、目の前にいる少女は、話したことが真実だと理解して、

更に質問してきている。

(珍しい…が哀れだ)

「あ、それじゃあ、次の質問いいかな？」

真実を知るには覚悟がいる。

知らない方が幸せなことも、この世には多いのだ。

真実を知ったが故に、その真実に怯えて今後を生きる者も少なくはない。

それを

(お前は—理解できてないのだろう？)

「駄目かな？」

構わない…そう言おうとした弾は、花梨の目を見て驚いた。

花梨の目には、真実を知らされたにも拘わらず恐怖の色が全く移っ

ていない。
見えるのは好奇心だけである。
「べ…別に構わない」
「やった」
弾の許しを貰うと何が嬉しいのやら、無邪気に喜ぶ花梨。
「えっとねぇ…マスターって決まったものを支配出来るんでしょ？
どうしてその力で自分を護らないの？
それに、ノンシェイパーやガーディアン、マスターっていうのは人間なの？
後、怪我した理由。まだ聞いてないよ」
（本当に珍しい…）
心の中で弾は更に驚きの声をあげていた。
花梨の質問には遠慮がない。
もっと知りたい—というような気持ちのみで、質問されている感覚すらある。
「ノンシェイパーは異形だ。いろんな姿になれる—といっても人にはなれない—上に、
ガーディアンもまた人間ではない。姿は人間だが、持っている能力は姿無き者とほぼ同等。
人間の持つ能力を軽く凌駕する—勿論、人間ではない。
そしてマスター。これは人間だ。
自分の力で自分を護らない理由はここにあって、マスターソウルの力は強すぎるために人間には扱えない。
…今後質問されそうなことも先に言っとくぞ？」
花梨の返答を待たずに、また話を再開する弾。
「マスターはガーディアンに〈力を分け与える〉ことが出来る。
でも、これは〈能力の適合者〉にしか出来ない。相性があるんだ。
そして力を分け与えて貰ったガーディアンは、マスターの力の一部分を扱うことが出来る。
ガーディアンは人間じゃないからだ。

本題の俺が怪我をした理由は、俺が適合者を探しているときに、姿無き者に襲われたんだ。
それで戦って負けた。それだけだよ」
嘘はついていないが、全てを話したわけではない。
(全てを話す必要はない―よな？)
数秒。静寂がその空間を支配する。
「じゃあ・・・さ」
静寂を破ったのは、もう無いだろうと思っていた花梨の質問。
「ガーディアンやノンシェイパーは、どうやってマスターを捜してるの？」
弾はその質問には答えずに、貸して貰っている花梨の父親のシャツを脱ぐ。
「!？」
シャツを脱いで裸になった弾の上半身に、花梨の視線は釘付けになった。
無駄な贅肉などなく、引き締まったその身体には古傷が大量に残っている。
その中には半分治りかけの傷もある。
そんな痛々しい身体の中心に、一つの刺青のようなものがある。
「この紋章(クレスト)に力を込めれば、マスターまで導いてくれる…見せてやるよ」
そう言うなり、冥想をするように弾は静かに目を閉じる。
すると、クレストから徐々に光が溢れ出て、その光が花梨の胸の中心に集結していく。
「ち…ちょっと、これ何!？」
花梨の驚きの声がしたので、弾は怪訝な顔をしつつも少しずつ目を開ける。
そんなに驚くことか？―喉まで出かかった言葉を飲み込んで、弾は花梨が言いたかったことを理解した。
クレストの光が導いたのだ。想像以上に近くにいたマスター―花梨

まで。
「お前が―ねぇ…俺の〈適合者〉かどうか調べるぞ」
花梨は動揺していた。
朝、いつものように学校に行く途中で血まみれの男を見つけて、かくまうって理由で家に連れてきた。
そして、世界の真実を教えられた。そこまでは問題は無かった…いや、むしろ楽しかった。
しかし、男の身体にあるクレストが放った光が、自分の胸に集まったとき―実感した。
さっきまで話されていたことは、自分と深い関わりがあることなのだということを…。
自分がマスター―それの意味することとは、今後、いつ、何処でノンシェイパーに襲われてもおかしくないということ。
そのことを悟り、急に恐怖が訪れる。
全身が震える。
口を開けても、言葉を発することが出来ない。
そんな花梨の肩に、優しく『ぽんっ』と弾の手が置かれる。
そして間髪を容れず、その手から〈弾の力の様なもの〉が少しずつ流れ込んでくる。
自分の中で、それが自分と一つになるような感覚。
その感覚は恐怖を和らげて、安らぎを与えてくれた。

―弾の力（？）が流れ込み始めて、どれくらい時間が経ったのだろう。
もう恐怖は消え去り、心は安らぎに満ちていた。
(こんな気持ちが永遠に続けば…)
一瞬―本当に一瞬だけ、そんな期待が胸を過ぎる。いずれ終わりが来ることは判っているはずなのに…。
〈適合者〉かどうか調べているだけなのだから…。

しかし、こんな安らぎを感じたことは今まで一度も無かった。
仲の良い友達と一緒にいる時より、落ち着いているのが自分でも判る。
（なぜ…？）
自分に対する疑問。
だが、その答えが出る前に──弾の力（？）が逆流を始めて、身体から抜けていった。
入ってくる時よりも、かなり早いペースで抜けていく。
花梨は、そのことに喪失感を覚えていた。
自分を埋めてくれていた、〈何か〉が抜けていく感覚を感じつつ、花梨は覚醒していく。
いつの間にか閉じていた目を開けて、弾の顔を見た時──先ほど感じた喪失感は一気に薄れていった。
弾は、花梨が目を開けたのを確認すると
「適合者だった。あと、お前が持っている魂が支配出来るのは『炎』だ。
つまり、お前は『炎の支配者（フレイムマスター）』だ」
と判った真実だけ、手短に伝える。
「適合…したの？本当に？」
「ああ」

第一話：第二章：ゲームスタート

「おはよー」
いつもと同じ登校時間。
「あ、おはよ。花梨」
いつもと同じ挨拶。
「ねー、なんで昨日休んだの？花梨がいなかったから、昨日の体育の試合、負けちゃったんだよ？」
いつもと同じメンバー。
「ゴメンゴメン、ちょっと風邪拗らせちゃってさ」
いつもと同じ…。
「へー…花梨が風邪って珍しいね」
昨日あったことが夢のようにさえ思える。
だが、実際にあった。
今つけている弾が昨日くれたネックレス――〈ヘルメス〉というものらしい――がその証拠。
見られても問題は無いのだろうが、念のため制服の下に隠している。
詳しい説明もなく、ずっとつけておけ、と言われたのでとりあえず従っていたりするのだが…。
(ただのプレゼント…じゃないわよね)
弾は、意味もなくそんなことは言わないだろう――多分。
(何か特別なネックレスなのかな…)
「花梨、花梨」
思考が、舞の言葉によって中断される。
「あ、何？」
「何？じゃないよー。朝っぱらからボーっとしちゃってさ…大丈夫なの？」
「う、うん。全然平気」
親友である斉藤舞は非常に心配性で、泣き虫。

彼女自身のことよりも、他人を心配しすぎて泣いている回数の方が多い気がする。
そんな舞は、女の花梨から見てもかなりの美人。
長身に黒のロングヘアー。肌は白くて綺麗だし、大きめの目も魅力の一つなのだろう。
体育以外の勉強は、ほぼ完璧に出来るという羨ましい頭の持ち主でもある。
「ホントに平気なの？嘘だったら…」
「わ、ちょ…ホントに平気だから、朝から泣かないでー。大体、嘘つく意味ないでしょ？」
今にも泣き出しそうな舞を見て、慌ててなだめる。
こういうことはしょっちゅうなのだが、とても耐えられるものではない。
周りが知らない人ばかりだと、自分が泣かせたように思われてしまうし、
知っている人だと、さっさと泣きやませろよ、とでも言わんばかりの白い目で見られてしまう。
とりあえず、それは避けたいという一心でなだめる…が、
「それはそうだけど…花梨、自分が辛くても私たちに言わないこと多いし…」
という一言で、反論が不能になった。
確かに、滅多に言わない。
本心は舞達に迷惑をかけたくないからなのだが、それを言ったからといって、舞が引き下がるとは思えなかった。
十中八九「迷惑でもないから言って」と言われてしまう。
だから、反論を止めた—直後。
ゴッ
鈍い音を立てて、舞の後頭部が〈広辞苑の角〉で叩かれた。
「ったーい…酷いよ司ー」
「酷いよ、じゃねえだろ。さっきから五月蝿いっての。大体、舞は

心配しすぎで逆に迷惑かけてんだよ」
舞を叩いたのは、彼女の双子の弟である司だった。
人付き合いがよく、時々優しい一面を見せる彼は、舞と同じくかなりの美形。
身長は１８０ｃｍくらいで、はねた髪の毛に小麦色の肌が似合っている。
舞が泣き出しそうな時は、大抵彼が舞を黙らせるので、クラスの皆からありがたがられている存在でもある。
「だからって叩かなくても」
舞が潤んだ目で少し怒ったように睨むが、司は全く動じず言い返す。
「叩かなきゃ泣き出してただろうが」
(本当に、何も変わらないなあ)
昨日、弾が寝に行く直前に言った言葉が頭を過ぎる。
『俺がお前を護る。お前はいつもどおりの生活を続けてればいい。何も変わらないさ』
(私を気遣って言ってくれたのかな…)
妄想じみた考えが浮かんで…すぐに消えた。
(馬鹿馬鹿しい。私、何考えてるんだろ…)
「花梨、花梨」
またボーッとしていたのだろう。
いつの間にか舞が顔を覗き込んでいた。
「ねえ、本当に大丈夫なの？」
その問いに、苦笑で答えることしか出来なかった。

一限目終了後は、いつもより騒然としていた。
原因は今日来た転校生らしい。
転校生が来たと知るや、それがどんな人か見に行こうとする生徒は非常に多い。
花梨もそんな中の一人で、先に見に行った人達が口々に
「すっごい可愛い！」だとか「抱きしめて頬ずりしたーい」とか言

っていたので、
興味津々で、転校生を見に行こうと思っていた矢先、弾を見つけた。
（へ？）
見間違いではない。あれは弾だ。断言出来る。しかもうちの制服を着て校内を歩いている。
それの意味することは…
（転校生って…弾のことだったの！？）
他の人の話から非常に可愛い女子だと推測していたので、その驚きは尋常ではない。
思わず叫びそうになって、口を手で押さえた時―目があった。
自分の方へとまっすぐ歩いてくる。
まずい。非常にまずい。
まだ距離が開いているので何も言ってこないが、目前に来た場合、何と言うのだろう。
普通、最初に名前を呼ぶ。
だが、弾は自分の名前を知っているだろうか？教えた記憶は無い。
では何と言うのだろう？
一つの、危険極まりない可能性が頭を過ぎる。
そして、案の定。
目の前で立ち止まった弾は、〈その言葉〉を口にしようとしたので
「マスぐっ…」
お腹を殴って黙らせた。
「何しやがる…」
少し強くやりすぎたのだろうか、お腹を抱えつつ、殴られた意味が判らない、とでも言いたげな顔をしている。
「危ないこと口走りそうだったからね。私の保身のためよ」
「花梨、何してるの？」
声のした方を振り向くと、舞がおどおどとこちらを見ている。
いや、舞だけではない。いつの間にやら、自分と弾を囲む形で人だかりが出来ていて、みんなに見られていた。

やってしまった…弾が転校してきたばかりなので、注目の的だと言うのを忘れていた。
黙らせるためとはいえ、殴ったところを見られた。
良い言い訳が思い浮かばない上に、死ぬほど恥ずかしかったので、とりあえず―逃げた。

意味が判らない。
聞きたいことがあったので、「マスター」と声をかけようとしたら突然腹を殴られた。
ガーディアンにも痛覚はある。確かに身体は丈夫だし、回復も非常に早い。だが、痛いものは痛い。
マスターが顔を真っ赤にして逃げ出してから十数秒。既に痛みは無いが、未だに殴られた意味が判らない。
保身のためらしいが、ガーディアンがいるのだから、マスターがそんなこと考える必要は無いはずだ。
（とりあえず、今はマスターを捜しに行かないと…）
ノンシェイパーの主な活動時間は夜なのだが、油断は出来ない。
幸い、昨日〈ヘルメス〉は渡しておいたので、マスターの位置は把握出来る。
「自宅に向かってるか…」
周りには聞こえない程度の大きさの声で、確認のために呟いて―周りの人を押しのけつつ、マスターの後を追った。

「マスター、何で殴ったんだ？」
追い掛けてきた弾が最初に言った言葉がこれで、聞いた瞬間、頭が痛くなった。
一般的な常識で考えればすぐに判るのに、まだ弾は判っていない。
説明は、思いっきり怒りを込めてしよう。うん、そうしよう。
「私には鈴木花梨って名前があるの。マスターなんて呼ばないで」
「今後そうする。それで、理由は？」

ささっさと話の確信に迫ろうとする弾の態度は、嫌いではない。
でも今回は別で、かなり口元が引きつる。
「マスターには主人って意味があって、大抵の人はそっちの意味で考えるわ。
だから、変に勘違いされたくなかったのよ！大体、何も変わらないって昨日言ったわよね？
学校で変な噂が流れたら、変わるに決まってるじゃない！
それくらい考え…？」
突然、弾の目つきが変わったので、思わず言葉を切る。そして、気がついた。
今、この場には自分と弾の二人しかいない。二人が黙れば、この近辺は静寂に包まれるはずである。
なのに、どこからともなく笑い声が聞こえる。弾の目つきが変わった理由がこれだった。
低い笑い声。非常に不気味で、人を小馬鹿にしたような笑い声。
それは、すぐに二つの話し声に変わった。
『見つけたね』
『弾君もいるな』
『やっぱりガーディアンは傷の治りが早いね。もう完治してるみたい』
『そうだな。でも、早く治ってくれたおかげで、俺らはまたゲームが出来るからいいじゃないか』
「出てきやがれ！」
二つの声に向かって、声を荒げて叫ぶ弾。
弾の声には、怒りと憎悪の感情が溢れんばかりに込められていた。
『そう焦るものではないよ、弾君』
『そうそう、ゲームは楽しまなくっちゃ』
『今日は、ただの挨拶だ。ゲームスタートは、明日の夜から』
『気を抜いてると、今回もマスターソウル貰っちゃうよー』
「クソがっ…」

弾が罵声を浴びせた後には、もう何も聞こえなかった。

第一話：第三章：異質の兄弟

今日は酷い一日になりそうだという花梨の予想は、見事に的中した。
朝、学校に行くや否や、質問の嵐がやって来たのだ。
「弾とはどんな関係なんだ」「なぜ、弾を殴ったのか」「昨日、早退した理由は」等々…。
それだけで充分辛かったのに、挙げ句の果てに
「花梨は弾と付き合っている」「一昨日休んだ理由も、弾と会うためだった」
「弾を殴って早退したのは、弾に酷いことを言われたから」などという見当違いも甚だしい噂までが広まっているし、
昨日のことを、弾は全然悪いと思っていない。話し声については、聞いても全然教えてくれない。
この三つのおかげで、花梨の機嫌の悪さは最高潮に達していた。
「花梨、機嫌直してよー」
昼休みに、いつものメンバー―舞と司―と教室で食事をとっていると、突然舞がそう言った。
「別に？機嫌悪くなんかないよ」
「悪いよう…ほら、人の噂も七十五日って言うし、こんな噂すぐ無くなるって…」
「ん？どうしたの？舞」
会話を突然切って、驚いた表情をしている舞。
何を見たのかと、その視線を追うと―弾がいた。
しかも、左手にコンビニの袋を持って自分たちの方へとやって来る。
(呼び方については、昨日忠告したから平気だと思うけど…)
「花梨、一緒に食うぞ」
頭を抱えて呻きたくなった。
確かに、呼び方は変わっている。呼び捨てに。
そのおかげで、教室全体がざわめいた。

「おい、聞いたか？」「呼び捨てとは…」「やっぱそういう関係だったんだな」「花梨って奥手だと思ってたのに、結構やるのねー」
「あーあ、彼には目つけてたのにな」「どこまで進んでるんだろ？」
耳が痛い。どうして、弾はこうなることを予想出来ないのだろうか？
弾を殴りたい感情を何とか押し込めて―逃げようとしていた、舞と司を掴む。
「舞、司…どうして逃げようとするのかなー？」
冷静に、笑顔で言ったつもりだったのだが、どうやらそれが逆に怖かったらしく、二人とも冷や汗を滝のように流している。
「い、いや、その…邪魔しちゃ悪いかなっと…」
「全然邪魔じゃないわよー。だ・か・ら居てくれるよね？」
疑問口調だが、命令に近い意味を込めていたのを感じたのだろう。
二人ともコクコクと頷いてくれた。
「花梨、その二人は？」
(あ、そっか。私以外は初対面だっけか)
弾の発言で初めてそのことに気がつき、手短に紹介をする。
「彼女は斉藤舞。彼は斉藤司。双子で、小学校からずっと一緒だった友達よ。
舞、司。これは木下弾。んっと…私の…従兄弟、そう従兄弟なのよ」
かなり怪しい言い方になってしまったのだが、そこは長い付き合いの二人。
ちゃんとこちらの意図をくみ取ってくれて、追及はして来ない。
「ふうん…弾君って言うんだ？よろしくねー」
「よろしく、弾君」
「よろしく」
かなり無愛想な挨拶をする弾。
だが、二人ともそれを気にする様子も無く、お弁当を食べながら雑談を始める。
雑談が始まって数分。普段なら会話がはずんで、楽しい一時…のはずなのだが、会話がはずまない。

勿論、その原因は弾にある。
というのも、基本的に会話に参加せずに、自分に話がふられた時のみ「ああ」とか「いや」とか反応する程度。
そんな弾を気にしてか、舞が少し不安そうな顔で尋ねる。
「あ、それじゃさ、弾君のこともっと知りたいから、質問していいかな？」
「ああ」
「じゃあ…何年何組？」
「一年3組」
（ぶっ！？）
思わず、口の中の物を吹き出しそうになった。
初めて会った時、弾は18歳だと言っていた。
18歳ならば、三年のはずである。なのに、一年と言った。
つまり
（歳を誤魔化してる…）
嘘をつく理由が判らない。だが、その理由を考える前に思考が一瞬止まった。いや、止められた。
司の質問によって。
「へぇえ、3組かあ。家はどこら辺なんだ？」
もし、これに弾が普通に答えれば—噂が、更に酷いものとなる。
それは確実に避けたい。という一心から、心の中で
（お願い嘘をついて、お願い嘘をついて、お願い嘘をついて）
と繰り返し神（信じてはいないが）に願い続けている—と、
「方角は花梨の家の方と一緒だけど…ちょっと遠い。越してきたばっかりだから、説明が難しい」
願いが叶った。

下校時、花梨は多少の疑問を抱きつつも、機嫌はかなり良かった。
「なにニヤニヤしてんだ、気持ち悪い」
そう弾に言われても、大して腹が立たない。

「だって、弾が嘘をついてくれたんだもん。しかも、私が望んだタイミングで」
「ああ、そのこと…〈ヘルメス〉の能力さ」
「このネックレス？」
制服の下から取り出したネックレスを見て、弾は頷いた。
「そう、ヘルメスは二つで一つでな」
言って、弾は自分の制服のポケットから、花梨のと全く同じネックレスを取り出す。
「ヘルメスには三つの能力があってな、一つ目は強く望めばお互いの位置が判る。
二つ目はマスターの力を分け与える時に、これを中継して分け与える。
そして、三つ目。これが嘘をついた理由なんだが…強く念じれば、その思考が相手に送れる。
嘘をついてって連呼してたのが聞こえたんだよ」
「へえ…便利ね」
「ああ、だから、常にヘルメスを身につけておけ…特に今晩はな」
最後に、ポツリと消えそうな声で弾が言った言葉を、花梨は聞き逃さなかった。
(今晩…？そういえば、昨日の変な声も今晩〈ゲームスタート〉って…)
詳しく弾に聞きたいが、昨晩同様、聞いても教えてくれないのだろう。
(そうだ、教えて貰えないなら、自分で突き止めるまでよね…)
この安直な考えが、後に弾を傷つけることになるとは、この時は思いも寄らなかった。

(そろそろかな？)
弾がこそこそと家を抜け出してから、１０分が経過した。
(強く望めばお互いの位置が判るのよね…)

下校時に教えて貰ったことを反芻しながら、心の中で強く望む。
すると頭の中に、上空からこの近辺を見下ろしたような地図が自然と浮かび上がった。
（すごーぃ…でも、弾の位置が判んないや…）
どんなに地図を見渡しても、何も見えないし感じない。
突然下降していくかのように、見下ろす範囲が狭まったかと思えば、その後すぐに上昇を始めて、最初くらいの高さになる。
そんなことが2，3回あった後、何となく予想がついた。
（集中すればするほど場所が特定されるのかな…下降することに気を取られると、集中力が乱れるから上昇する…
うん、筋が通ってる。そうと判れば集中集中…）
見事予想は的中した。どんどん下降していく上に、上昇はもうしなかった。
やがて、場所は私有地である大きな空き地付近に固定された。
弾はここにいる。
そう判断した花梨は、家を飛び出してそこへと向かった。
幸い、それほど遠い場所ではない。
だが、時間は午後11時。辺りは闇に包まれていて、光源といえば道に一定間隔で置いてある街灯のか弱い光のみ。
道を進むのに問題は無いが、闇に包まれているという恐怖と不安から、時間の感覚が狂う。
もう数時間歩き続けたのではないか。あるいはまだ一瞬しか経っていないのではないか。
そんな妄想に苛まれつつ、いつの間にか小走りになっていた足を止める。
〈声〉が聞こえたからだ。昨日と同じ、声。
思わず声のした方へと走り出す花梨。
そして、走り出して数秒も経たないうちに、異様な光景を目の当たりにした。
何にも使われていない私有地で、弾が、二つの闇と戦っている光景

を。
一つは目が黄色く、爪と牙が異常に長い、人並みの大きさの犬が立ったような姿。
もう一つは碧い目で、尻尾が長く、丸太のような巨碗を持った、熊のような姿。
それらは素早い動きで弾を翻弄していた。
「はは、どうしたんだい？弾君。君の刀、さっきから宙を斬るばかりじゃないか」
碧眼の軽い挑発に、弾は長くてスマートな刀を振りかぶることで答える。
「調子に…乗るな！」
叫ぶと同時に、弾が打ち下ろした刀から炎が発射された。
鮮やかで、大きな紅い炎。
だが、碧眼はすんでの所で全身を大きく捻り、炎をかわす。
「あっぶねー。いきなり炎を飛ばしてくるから驚いちゃったよ、兄ちゃん」
「前はそんなことしなかったから…恐らく、昨日一緒にいたマスターが適合者だったんだろうな」
碧眼の呼びかけに、自分の見解で答える黄眼。
「2対1だからといって、炎を使うなら油断は出来んな…あの戦法でやるぞ」
黄眼のその言葉を最後に、突然二人（？）が掻き消えた—直後。
地面から碧眼の尻尾が突然出てきて、その近辺にあった街灯を全て破壊した。
月光は雲に阻まれて地に届かないため、街灯が無くなったことで、辺りは闇に閉ざされた。
闇の中で、黄眼の爪と牙が、碧眼の尻尾と巨碗が、四方八方から弾を襲う。
かわせないスピードではないのだが、かなり見えにくいので、反応がワンテンポ遅れる。

そのため少しずつだが、弾の足に、腕に、全身に傷が出来ていく。
（あわわ…どうしよう…このままじゃ……）
コソコソと隠れながら現状を見ていたのだが、どう見ても弾に分が悪い。
先程から防戦一方で、たまにカウンターを狙う素振りを見せても、相手の姿が見えていないので成功していない。
（せめて姿が見れれば……そうだ！）
「弾！炎を出して！」
思いっきり叫んだ。声が、澄んだ夜気にとどろいていく。

叫び声が聞こえた。声がした方を振り向けば、なぜか花梨が佇んでいる。
炎を出せ—相変わらず意味が判らない言動をする女だ。
（だが、この現状で何をしても、これ以上不利になるとは考えにくいか…）
とりあえず従って刀を右手だけで持ち、左手の五指からこぶし大の炎弾を、出鱈目な方向に撃ち放った。
当然当たらない—が、理解した。炎を出す真意を。
「ハッズレー。可愛らしいマスターの言うことを聞いたって、僕たちには勝てないよ」
「それにしても、マスターを戦場に連れてくるとは…マスターに自身のかっこいい姿を見せたかったのかね？」
「キャハハハハ、そりゃあ残念、今回も弾君の負け確定だよ」
この馬鹿兄弟は気がついていない。
そのことに思わず顔がほころんでしまう。
そう告げるなり、碧眼が地を蹴る。
「さて…と、そろそろ勝たせて貰うよー」
進行方向は判らない。だが、最後に声のした方向に炎弾を撃ち放つ。
碧眼は、真正面から突っ込んできていた。
自分との距離は残り５ｍ。

膝を曲げて重心をしっかりと落とす。
残り４ｍ。
左手を空に向かって突き上げて、炎弾を撃ち上げる。
残り３ｍ。
両手で刀の柄をしっかりと握る。
残り２ｍ。
碧眼に向かって、強く地を蹴る。
残り１ｍ。
黄眼が、避けろ、と叫んだ。勘付いたのだろうが、もう遅い。
すれ違った—直後。
悲鳴が聞こえた。
「ギャアアア！」
右腕でうまく身体を庇ったので
胴を断ち切るつもりだったのだが、黄眼の叫び声に反応した碧眼が、—振り向いた先には、右腕の無くなった碧眼が苦痛に顔を歪めていた。
「なぜ…僕の位置が判った？」
答える義理は無い—が、口が開いていた。
「炎は熱だけじゃなく、光も生む。それが答えだよ……さて、止めだ」
「クク…なるほどねえ……だが、ちょっと詰めが甘いんじゃあないかい？」
「……どういうことだ？」
「こういうことさ」
声は、後ろから聞こえた。
振り返ると、黄眼が爪を花梨の首筋に突きつけていた。
「弾、ごめーん」
花梨は冷や汗をかきつつ、苦笑いを浮かべている。
形勢逆転されてしまったことを理解して、動けなくなった弾に、碧眼が嘲笑うような声である提案をした。

「大事な大事なマスターを護りたいんなら、僕のリンチを受けてよ。そうすれば、マスターのことは考えてあげてもいいよ」
嘘だ。俺を殺した後に、必ずマスターソウルを奪う。そんな奴らだ。だから今後のことを考えれば、マスターを犠牲にしてでも戦うべきだった。
それは判っている。判っているのだが—拒めなかった。
理由はよく判らない。ただ、何となく嫌だった。
だから、武器を捨てて棒立ちになった。
「そうそう。物分かりがいいねえ…それっ」

碧眼の鞭のような尻尾が、弾に襲いかかる。
パンッ　パンッ　パンッ
音が鳴るたび、弾の服が裂け、鮮血が迸った。
そのたびに、弾の顔が苦痛に歪む。
「弾！私のことは気にしないで逃げて！」
あまりの痛々しい姿に見ていられなくなって、叫んだ。
すると、音が已んで—笑い声になった。
「キャハハハハ、人間の女ってのはみんな同じこと言うんだね」
「クックック…自分が一番危険な状態ということを、理解していないのかもしれん」
何のことか、よく判らなかった。
だから、弾の方を見ると—凄く辛そうな顔をしていた。
「アイツも……そう言ってたのか？」
震える声で弾が言うと、一瞬だけ笑い声が已んで—また笑い出した。
「これはいい。君が護れなかったマスターの最期の言葉を聞けなかったのか？」
耳を疑った。弾がマスターを護れなかった？
「嘘よね？弾。こいつらの作り話なんでしょ？」
数秒間を開けて、弾は—黙って首を横に振った。
顔は先程よりも辛そうで、悲しそうだった。

「キャハハハ、新しいマスターに教えなかったのか。そりゃそうだよねえ？
動けなくなるくらいの傷を負わされて、目の前でマスターソウルをゆっくりと奪われたんだもん。
しかも、死ぬ直前のマスターの言葉が、逃げて、だ。
護るはずの女にそんなこと言われるなんて、情けなくて誰にも話せないよねー」
碧眼が一言発するたびに、弾の身体は怒りからか悲しみからか――震えていた。
目の前で、マスターソウルをゆっくりと奪ったと言っていた。恐らく、弾に見せつけるように奪ったのだろう。
その時の弾の心情を考えると
「最低……」
自然と言葉が出てきた。
「最低？そりゃどうも。僕たち兄弟にとって、それは最高の褒め言葉だよ」
「さて…弟よ、そろそろ弾君にも構ってあげなさい」
「おっとそうだね、僕の腕を斬り落とした罰を与えないと…そらっ」
パンッ　パンッ　パンッ
自分の身体を傷つける尻尾を避けようともせずに、弾はなぜか笑いながら言った。
「逃げれるわけ…ねえじゃねえか……マスターを護る。俺は、その使命を今度こそ成し遂げるんだ…ガーディアンとして。
次にマスターを奪われる時は……俺の命が尽きる時だ！」
今度は誰も笑わなかった。
「……それじゃあ、そろそろゲームを切り上げよう。弟よ、弾君の望み通りに止めを刺してあげなさい」
「オッケー、兄ちゃん。弾君、これ避けたら、君のマスターがどうなるか判るよねー？
君が前に味わった体験に似た体験を、君のマスターにもして貰おう

よ。キャハハハハ」
弾と似た体験？目の前で、殺される……？
（そんなの……嫌）
だが、この状況で自分に一体何が出来るのだろう？
弾を助けるどころか、人質にされてしまっているではないか。そのせいで、弾が窮地に追いやられているのではないか。
自分がこの場に来なければ、こんな状況にはならなかったのかもしれない。
考えれば考えるほど、後悔の念にかられていく。良い考えなど、何一つ浮かびはしない。
そうこうしているうちに、碧眼の尻尾は槍のように鋭くなっていた。黄眼は、花梨の首筋に爪を突きつけつつ、ニタニタと笑みを浮かべている。
弾は、覚悟を決めたかのように全く動こうとしない。
それらを見た瞬間、
（弾が……死ぬ？……死ぬ……死ぬ……死……死……死……）
頭の中で、同じ単語がぐるぐると廻り出す。
（い……や……）
心臓の鼓動が大きくなり、目の前に霞がかかったかのように全てが見にくくなる。
「それじゃ、僕の腕を斬った罰として、串刺しの刑ー。３秒前」
近い位置からの声が、何処か遠くで聞いているような感じがする。
（いや……）
身体の中にある『何か』が、溢れ出そうになる。
「２」
「いや……」
溢れたらどうなるのか、そんなことはどうでもよかった。ただ、弾に死んで欲しくなかった。
「１」
「嫌ーーーーーーーーー！」

だから溢れさせた──途端、視界が紅蓮の炎に包まれた。
いや、身体全体が火柱によって包まれていた。後ろにいた黄眼は、悲鳴もあげずにただただ燃えていた。
だけど全然熱くなかったうえに、自分や自分が今着ている服も、全く燃えていなかった。
「そんな！？〈ピキュリアー〉だなんて……兄ちゃん！」
火柱の外から驚いた声で碧眼が叫ぶが、呼んだ相手はもう燃え尽きて、跡形も残さずこの世から消え去っている。
そして、碧眼が火柱に注意を逸らした時、弾の行動は素早かった。
先程捨てた刀を拾い、碧眼に駆け寄る。
気配を感じ取ったのか、碧眼が弾に振り返る──が、その時には既に、碧眼の身体は上下真っ二つに断ち斬られていた。
地に倒れた下半身が、宙を舞っていた上半身が、自分を包んでいた火柱が、
霧散していくのを見つつ──花梨の意識は、闇へと落ちていった。

第一話：エピローグ：休息

あの兄弟との戦いから、３日が過ぎた。幸い、祝日を挟んでいたので、
弾の新しい服や、傷の手当てに必要な包帯などを（弾はいらないと言ったが）買いに行けたし、
傷の手当てをしている間に、いろんな話もゆっくり出来た。
「歳を誤魔化した理由は？刀を何処に隠し持っていたの？ノンシェイパーはもう来ないの？最後の火柱は何だったの？」
という風に殆ど花梨の質問だったが、
「歳を誤魔化したのは、花梨の年齢が判らなかったから。刀は〈ヘルメス〉から取り出した。
ノンシェイパーは、多分また来るが、そんなにすぐには来ない。あの火柱は俺が出した」
といった具合に、最初に出会った時のように淡々と、全ての質問に答えてくれた。
そして今。
弾と、舞と、司と一緒に昼食をとっている。
クラス内で噂になっていた、『弾と花梨は恋人説』は弾（を脅して）と一緒に従兄弟と言い張ったので、
それなりに落ち着いていた。
「なあ、弾君ってめんどくさくなってきたから、弾って呼んでいいか？」
「ああ、それじゃあ俺も呼び捨てにするよ」
この昼食も、弾がいるのが普通になり、会話もそれなりにはずむようになってきた。
（いつもの生活に、弾が増えただけで何にも変わらない……本当ね。それに、もうノンシェイパーが襲ってきてもそんなに怖くない。だって……

『次にマスターを奪われる時は……俺の命が尽きる時だ！』って言ってくれたもんね）

「花梨ー、何顔を真っ赤にしてにやけてるの？」

どうやら、顔に出ていたらしい。

そういう所を直さなきゃなーと思いつつ、舞の質問には苦笑で答えるしか出来なかった。

第二話：プロローグ：来客

「Ｈｕｍ……Ｉ'ｍ　ａｌｒｅａｄｙ　ｔｉｒｅｄ」（ああ……もう疲れましたわ）
町の道路を走る一台のベンツの中、いかにもお嬢様のような少女が、愚痴をこぼしていた。
「お嬢様、ここは日本です。日本語をお話ください」
老紳士風の運転手がそんな少女の愚痴ではなく、日本語を使わなかったことをたしなめる。
「はあ……面倒ですわね。ここには三人しかいないのだから、別に英語でも平気でしょう？ジャック」
「いいえ、日本にいるうちは、常に日本語で喋るように癖をつけておきませんと」
文句を言う少女に、ジャックと呼ばれた老紳士は諭すように言い返す。
「それに、『郷に入っては郷に従え』ということわざも、この国にはございます」
「それじゃあリチャード、貴方はどう思いますの？」
突然少女に意見を求められたのだが、こういうことは良くあることなので、
助手席に座っていたリチャードは落ち着いて自らの意見を述べる。
「私は執事さんの意見に賛成ですね。やはり、『慣れる』というのは重要ですから」
少女は二人に反対されたので、少し口を尖らせつつ、さり気なく話題をすり替える。
「ところで、本当にこんな町に弾様がいらっしゃるんですの？」
「情報が確かなら……それよりお嬢様、話題をすり替えて誤魔化そうとしてますな？
日本にいるうちは、日本語だけを使ってください。頼みますぞ」

誤魔化すことが出来なかったので更に口を尖らせて、少女は渋々首を縦に振った。

「判りましたわよ……それにしても、早く弾様にお会いしたいですわ」

第二話：第一章：平穏

朝、目覚ましの音で目が覚めると洗顔などをして、自分のお弁当を作る。
そして制服に着替えて、学校へと歩き出す。
学校では適当に授業を受けて、放課後は部活をする。
部活が終われば一人でのんびり家へと帰り、夕食を作ったりTVを見たりお風呂に入ったりする。
今まで花梨は、そんな平穏な暮らしをしていた。
ところがある日、突然、学校へ行く最中に、血まみれの少年――弾を見た。
ここから花梨の生活に異変が生じてきた。とても信じられないような真実を、少年に教えられた。
教えられていくうちに、その真実は自分と深い関わりがあることを知った。
最初は半信半疑だったのだが、結局弾を、真実を信じた。理由は何となく。
だが、すぐに真実だという裏付けが出来た。
少年の話に出てきた、〈姿無き者(ノンシェイパー)〉が現れたからである。
苦戦の果てにノンシェイパーの兄弟を倒したのだが――
またいつ来るかも判らないという理由で、弾は家に住むことになった。
それ以来、弾と一緒に二人きりで暮らしている。
まあ男と女、一つ屋根の下で暮らしているとは言っても、弾が何かをするわけではないので大した問題はない。
それに、弾と一緒に暮らし始めてからは、弾に関する様々なことが判った。
まず、起きるのが遅い。おかげで毎朝、親のように弾を起こすのが日課になってしまった。

次に、（腹が立つが）頭が良い。どこで覚えたのか、料理も自分ほどではないが、そこそこ出来る。
無愛想に見えるが、実はそうでもない。等々…。
「〈守護者(ガーディアン)〉は人間ではない」と、弾は言っていたが正直、人にしか見えなかった。
確かに身体能力は人以上だし、炎を操ることも出来る。だが、それがなんだと言うのだろう？
見た目は人と何ら変わりがないのも事実だし、弾が時折見せる優しさは人間そのものだった。
ゆえに花梨はこう考えている。
弾はガーディアンなどである前に一人の人間だ――と。

「パスパス！」「ほらそこ、マークついて！」「あちゃー、入れられちゃった」「ナイスシュート！」「ドンマイドンマイ」
女子バスケットボール部の声が、体育館の中に木霊する。
今は、メンバーを二つのチームに分けて練習試合をしているようだ。
弾はそんな様子をのんびりと眺めていた。
部には（誘われたことはあるが）入っていないし、時間は有り余っている。
先に帰ってもいいのだが、帰ってもすることが無い。
だから、自分の適合者である花梨の練習している様子を眺めていた。
自分はガーディアンなので、〈支配者(マスター)〉を護るため、常にマスターの近くにいるのは普通である。
だが一週間ほど前に一度、ノンシェイパーと戦って勝利を収めている。
ノンシェイパーがマスターをいつ襲ってくるか判らないとは言っても、そんなにしょっちゅう来るわけではない。
それなのに花梨の近くにいる理由は、やはりやることが無いからだった。
考えてみれば、最近はずっと花梨の近くにいる気がする。

クラスは違うのだが、授業の合間の休み時間は常に一緒だし、昼食を取るのも登下校するのも一緒である。
その理由はよく判らなかった。悩む、とまではいかないが、その理由を冥想をするように考え込むこと数分。
突然、視界の中で何かが転倒した。見れば転倒したのは花梨で、痛みからか顔が少し引きつっている。
「花梨、大丈夫？」
近くにいたの女子が花梨に近寄って聞くと、花梨は首を横に振った。
「ちょっと足、捻ったみたい……保健室に行ってくるね」
「あ、じゃあ木下君が背負って、連れて行ってあげたら？捻挫とかしてるかもしれないしさ」
花梨と同じチームの女子がそう言うと、その付近にいた女子が同意の声をあげた――ただ一人を除いて。
「ち、ちょっと、なんでそこで弾が出るのよ！私一人でも平気だっンンー」
顔を真っ赤にして反発する花梨の口を、言い出しっぺの女子が塞いで、勝手に話を進めていく。
「木下君、花梨を背負うことくらいは出来るよね？あ、保健室の場所は判る？」
「ああ、花梨くらいなら楽勝だ。保健室は校内図を覚えているから判る」
すると、聞かれたことに答えただけなのだが、
なぜか花梨は更に顔を真っ赤にして、怒った時になるような真剣な目でこちらに何かを訴えかけてくる。
〈ヘルメス〉をつけていたら、何かが聞こえてきたことだろう。
だが、花梨は今は体操服を着ているので、ヘルメスを外していた。
「ンンンーンーンンーンー」
必死に何かを言おうとする花梨を、上級生と思われる女子が諭す。
「あのね、花梨。あなたは一年生だけど、うちの部の主戦力の一人なのよ？

変な怪我だったりしたら、あなただけじゃなくて私たちも困るの。それに、木下君が嫌いってわけでもないんでしょ？　従兄弟なんだから気にする必要無いじゃない。ね？」
上級生の話を聞いて大人しくなった花梨を見て、口を塞いでいた女子はようやく花梨の口を解放した。
「さて、それじゃ木下君、後は任せたわよ」
「ああ。ほら、負ぶされ……よし、行くぞ」
「行ってらっしゃーい」
気の進まなそうな花梨を背負って、女子バスケットボール部員の見送りを受けながら体育館を出て数秒。
花梨が突然口を開いた。
「ねえ、弾」
「なんだ？」
「さっき、「花梨くらいなら楽勝だ」って言ったわよね？……どうして私の体重知ってるの？
もしかして、私に変なことした……？」
思わず、ずっこけそうになってしまった。どうしてこう、女というのは被害妄想が凄いのだろうか？
少し頭が痛くなるのを感じつつも、勘違いされたままというのは気に食わないので、説明をする。
「お前な……あの日、気絶したお前がどうやって家に帰ったと思ってるんだ？」
説明はそれだけで十分だったらしく、花梨は
「あ、そっか……ゴメン」
と言って黙ってしまった。反省しているのか、顔を真っ赤にして下に向けている。
ただの勘違いだったなら、俺もここで黙っただろう。だが勘違いするにしても、今回は内容に問題があった。
もし姉貴が今のを聞いていたなら——考えただけでもゾッとする。恐らく、説明する間もなく俺の命は消えていただろう。だから少し

だけ、お返しをしてやった。
「それとも、『そういうこと』をされているのを期待していたのか？」
するとその言葉に反応するように、花梨の身体がピクッと一瞬だけ震えて――
肩に置いていた腕をいきなり首に巻き付けて、スリーパーホールドをしてきた。
「ち、ちょっと待て、マジで入ってるって、首と頸動脈絞まってる！」
必死に叫ぶが、返ってくる声は冷静な感情と楽しんでいる感情が入り交じった声。
「謝って、反省までしていた乙女にそういうこと言う？普通はここで慰めたりするもんでしょー？」
「誰が乙女なんウッ……」
言い返そうとしたのだが、女とは思えないような腕力で更に締め上げてくる。
その状態で数秒。正直意識が遠退きかけた時に、ようやく首を圧迫していた腕が外される。
「ゴホッゴホッ……お前……後一秒でも長く絞めてたら、いくらマスターでも燃やしてたぞ……」
本気で言ったのだが、花梨は冗談と取ったらしい。
「あはは、でも、反省したでしょ？」
花梨を背負っているから判らないが、振り向けば満面の笑みを浮かべていそうな声が返ってきた。

花梨の住む町の中のとあるビルの屋上。
そこには、三つの影が横に並んで立っていた。
「Who　on　earth　is　she!?」（な……あの女は一体なんですの!?）
真ん中に立っている少女が突然で声を荒げると、少女の右手に立っ

ているジャックが少女を注意する。

但し、注意の内容は声を荒げたことではなく、英語を使ったことである。

「ですからお嬢様、日本語をお使い下さい」

「Big mouth……Oh! That bitch, how could she straugle Mr. Dan's neck!?」

(五月蝿いですわね……ああ! あの女、弾様に背負って頂いている分際で弾様の首を絞めるなんて!?)

少女が手に持って必死に覗き込んでいるのは、特殊な双眼鏡。そして、見ている先は花梨の高校、秋野高校だった。

夢中になって日本語を使うことを完全に忘れている少女と、少女が言うことを聞かないので頭を抱えているジャックを横目で見つつ、リチャードはただただ苦笑する。

と、いきなり少女が双眼鏡を覗き込むのを止めて、こちらを振り向く。

「Well it seems like we have a jurk on 『my』 Mr. Dan……Richard, check up on him immediately will you?」

(どうやら『私の』弾様に害虫が付いてしまったようですわ……リチャード、至急この女について調べなさい)

久しぶりの命令。大した命令ではないが、どんな命令でも従うのがこの少女と交わした契約。

無言で頷くと、少女の横のジャックが手をリチャードの額に当てる。

そして、その手が光り出すと、そこから、とある少女の顔がイメージとして直接脳内に伝わってくる。

完全にイメージが伝わると、ジャックは手を下げてゴホン、と咳払いを一つ。

「お嬢様……お願いしますので、英語を使うのはお止め下さい」

「あら？ 私、英語を使ってたかしら？」

どうやら本気で言ってるらしい少女を見て、思わずリチャードは声を漏らす。

「自覚皆無ってのが一番質悪いですね」

「……？ まあ、何のことか判らないですけど、しっかり調べなさい」

「でさ、弾のやつ、何て言ったと思う？『誰が乙女なんだ』だってさ、酷いと思わない？舞ー」
「そ、それはちょっと酷いかも……」
昼食の時間。花梨は昨日のことを舞に話していた。
自分が被害者になるように、自分に都合の悪いところは全てカットしてだが。
「何が『酷い』だ……言い終わる前に本気で首絞めたのは誰だ？おかげで、失神しかけたんだが」
勿論弾は、一方的な被害者になるのは気にくわないため、花梨が言ってないところを横から付け足しているが、
「それは少しやりすぎじゃないか？花梨」
「ふーん。司は弾の味方するつもりなんだ？」
口では、男よりも女に分があるらしい。
「い、いや……そういうつもりじゃないけど、客観的に聞いたら……な？」
「『な？』っじゃないわよー。舞も何か言ってやって！」
時々司がフォローを入れてくれるが、花梨は内容ではなく勢いだけでそのフォローを片っ端から潰していく。
「んーと……『口は禍の元』ってこともあるから……でも、花梨も司の言ったとおりやりすぎのような気もするし……
だから、今回はおあいこってことじゃ……ダメ？」
舞はといえば、とりあえず両方に非があるということで、この場を丸く収めようとしている。
手っ取り早くこの会話を終了させるには、二人が舞の意見に賛成するのが一番なのだろう。
弾も、この水掛け論を終わらせるのにはそれが一番だと判っていた。
判っていたのだが

「それはダメだ。大体、人が親切にも負ぶってやったというのに、恩を仇で返したのは花梨だろう？」
子供のような意見が口から出ていた。
「あっ！全部私のせいって言いたいの！？純情で可憐なこの乙女に向かって！！」
「ああ！？どこの誰が純情で可憐な乙女だってんだ！」
「私に決まってるじゃない！」
「お前が純情で可憐な乙女ならな、世界中の九割九分九厘の女が純情で可憐な乙女になる！」
「ひっどーい！……もう怒った。早退する！」
そう言い残して、自分の鞄を掴んで教室から花梨が出て行った後。
喧嘩をする前は騒然としていた教室内も、今ではしん、と静まりかえっていた。
クラス中の人々が、弾がどう動くのか静かにチラチラと盗み見ている。
しかし、弾はその視線を感じつつも、動く気は無かった。
すると、なぜか司が動いた。弾の肩に、ポンッと手を置いてクラスメートの視線を代弁する。
「追い掛けた方がいいと思うぞ……花梨の場合、謝るのが早ければ早いほどいい」
だが、腹の虫が治まりきっていない弾は、司の言葉を無視。
司も、これ以上言っても無駄と悟ったのか黙りこくる。
横で舞が潤んだ瞳で司と同じことを訴えてくるが、それにも気付かないふりをする。
そんな状況で時が過ぎていき、昼休みが終わるまで後二分という頃。
弾は少し離れた位置に、微弱ながらも『力』が発現したのを感じた。
「っ！」
思わず立ち上がる。周りの人が驚いた顔をするが、知ったことではない。
『力』を感じるということは、ガーディアンか、〈トレイター〉が

いるということ。
もし感じた『力』がガーディアンのものならまだしも、トレイターのものなら現状は最悪。
（クソッ……なぜ花梨の後を追わなかったんだ……）
自身を責め、後悔をしつつ、弾は走り出す。ヘルメスで花梨の位置の確認する時間すら勿体ない。
走って向かう先は『力』を感じた場所——花梨の家がある住宅街から少し離れた位置にある、山の中。

花梨は通学路の途中にある小さな商店街を歩いていた。
（何よ何よ……あそこまで言う必要は無いじゃない！）
考えれば考えるほど腹が立ってきて、怒りに比例するように早足になる。
商店街を抜けて真っ直ぐ進めば、自宅のある住宅街に入る。
（家に入ったら鍵かけて、弾を閉め出して……）
人混みを掻き分け、身体は自然と走り出す。
そして住宅街に差し掛かる直前。頭の中で突然、別の思考が生まれた。
（家はダメ。あの山へ……）
花梨はその思考に従って左折。山へと進む道に入った。
少し進めば、山を登る階段が見えた。
思えば、近所に住んでいるのに、この山のことはあまり知らなかった。
知っていることといえば、山の頂上には寂れた寺があるということ。
そして、人が滅多に来ないという二つのことだけ。
なぜこんな山に来たんだろう、という疑問が頭を過ぎる。
だが、その答えが導き出される前にまた別の思考が生まれた。
（左へ……）
先程の疑問を忘れて左を見れば、あるのは林。
こんな所を進んで何があるのだろう？という新たな疑問は生まれな

い。
頭の中にあるのは、ただ進まなきゃという使命感と、こういう場所はスカートでは歩きにくいなというシンプルな感想。
林の中を進んでいると、前方に人が二人見えた。
一人は身長１４５ｃｍあるかないか位の小柄な、それでいてかなり存在感の強い少女。
艶やかなセミロングの金髪で碧い目の少女が身につけている物は、全て高価なものだと一目で判る。
指輪、ネックレス、ブレスレット、イヤリング、髪飾り。
シンプルながらもそれら一つ一つが光り輝き、少女の可愛らしさを引き立てている。
もう一人は身長１６０ｃｍ後半くらいで、タキシードを着崩すことなくピッシリと着ている、穏やかな顔つきの老紳士。
ブラウンの目で髪の毛は白く、杖を持っているがその姿勢はしっかりとしていて、杖に頼っている様子はない。
二人に共通しているのは明らかに日本人ではないということ。
「Ｙｏｕ'ｒｅ ｆｉｎａｌｌｙ ｈｅｒｅ……Ｉ'ｖｅ ｂｅｅｎ ｓｉｃｋｉｎｇ ｔｉｒｅｄ ｏｆ ｗａｉｔｉｎｇ」（ようやく来ましたわね……待ちくたびれましたわ）
と、口を開いたのは少女。但し聞こえてきたのは英語。花梨は英語が嫌いで、更にリスニングが大の苦手。
勿論、本場の英語を聞き取ることなど出来るはずもなく、花梨はただ慌てる。
（ひゃあ……ど、どうしよう……英語なんて無理ー……）
しかし花梨の考えは老紳士の言葉で杞憂に終わる。
「お嬢様、ですから……」
聞こえてきたのはしっかりとした日本語。余程しっかりと勉強したのだろうか、外国人特有の訛りも無い。
「あら、やってしまいましたわね。まあ次からは気をつけますわ……さて、そこの貴女」

言って少女が指差したのは、花梨。
「名前、鈴木　花梨。性別、女。身長、１５４ｃｍ。体重、４１ｋｇ。スリーサイズは上から７０，５５，７１。
秋野高校、女子バスケットボール部に所属。一年生ながらもレギュラーの座を得ている。
成績は中の下。友人関係は概ね良好。同クラスに幼なじみの斉藤舞、司がいる……どこか訂正する場所は？」
（あれ……これって……）
突然のことで頭が回らなかったが、少女が言ったのは紛れもなく花梨のプロフィール。
（うそ……スリーサイズまで当たってる……ていうか、何で私のこと知ってるの？）
だが、花梨が口を開けてその疑問を投げかける前に、また少女が話し出す。
「そう、訂正は無いのね。それじゃあ、貴女に聞きたいのはこれだけよ……
貴女は弾様とどういう関係なの？」
質問をされた瞬間、トクン、と心臓が脈打つのを感じた。
なぜ、この少女は弾のことを知っているのだろう。いや、それよりも実際、自分は弾とどんな関係なのだろうか。
ただのマスターとガーディアンの関係？それとも……。
思い出されるのは、弾と出会った時から今日までの短い期間に感じたこと。
血まみれの弾を見た時に感じた恐怖。
この世の真実と自分は深い関わりを持っていると知った時に感じた不安。
適合者かどうか調べている時に感じた安らぎ。
弾が馬鹿なことを言った時に感じた怒り。
ヘルメスを思い通りに使えた時に感じた嬉しさ。
それら感情を思い出して考える弾との関係。

女の気持ちを全く考えない弾に、怒りを感じることは多くあった。
しかし、弾と一緒にいる時は共通して『何か』を感じていた気がする。
その何かがもう少しで判るという時、耳に入ってきたのはまたもや少女の声。
「ふうん……ただのマスターとガーディアンの関係なんですの。まあそれだけならほうっておいても害は無いんでしょ・う・け・ど……
勘違いされる方が多いことは教えておくべきでしょうね。勘違いがどんどんエスカレートするのはよくあることですし」
え……、と花梨は途惑った。こちらは何も話していないのにどうして話が進むの、と。
何かあるのかと思い少女の方を見るが、うっすらと微笑を浮かべているだけ。
（なんだか怖い……）
気まぐれで来ただけの場所なのに、なぜ待ち合わせをしていたかのように会ったのだろう。
しかも、少女は花梨のプロフィールを知っていた。
本人も最近知った、自分がマスターということさえも。
明らかに偶然などではない。
ノンシェイパーは人の姿にはなれないらしいが、この少女からはどこか危険な薫りが立ち込めていた。
老紳士はというと、先程から何か考え込んでいるような顔をして黙っている。
逃げるべきなのだろうか。今すぐ後ろを向いて走れば、逃げ切れるだろう。
老人は杖を持っているし、少女は華奢な感じがする。それに比べて、花梨はバスケットボールで足を鍛えている。
足はまだ少し痛いし制服のスカートを履いてはいるが、問題は無いはずだ。

だが、先程の少女の問いが決断力を鈍らせる。
どうするべきか、と考えているうちに、また少女が話し始めた。
「貴女は、弾様に適合者かどうか調べられている際、安心感のようなものを感じたはずですわ。
先に結論から言いますと、それは当然のことなんですの。
ガーディアンとはその名の通り、守護者。
ガーディアンは適合者かどうか調べる際、自身の力を相手に送ることで調べますわ。
そのため力を送り込まれた相手は、不安や恐怖を感じる物から一時的に守護されますの。
不安や恐怖は、安心とは相対するもの。
ですから、安心感を感じるのは当然なんですのよ」
花梨は少女の言いたいことがよく判らなかった。
勘違い……？
安心感を感じて当然、というのがどうしたのだろうか。
確かに、安心感を感じて当然。というのは知らなかった。
しかしそれはただ知らなかっただけで、別に何か勘違いをしていたわけではない。
「ああもう……」
と、少女が突然顔をしかめた。
「何で判らないのでしょう……これだから理解力の乏しい人は……判りやすく説明して差し上げますと、
恋愛経験が殆ど無い人は、その安心感を恋愛感情だと勘違いをなさいますの。
ですから、今後もそんな勘違いをしないように、と忠告をして差し上げてるんですわ」
トクン、とまた心臓が脈打ち、ああそうか、と気がつく。
弾に感じていた『何か』は、恋愛感情なのだと。
気がつくと同時。
少女は更に顔をしかめて

「貴女……こちらの話を聞いていたんですの？　それは恋愛感情などではありませんわよ」
「違う」
考えるより先に、言葉が出ていた。
「私が弾のことを好きなのは、そんな安心感があったからなんかじゃない」
「っ！……ジャック、『悪夢』を見せて差し上げなさい」
少女の言葉に、老紳士──ジャックの顔に驚きの色が浮かぶ。
「お嬢様……」「いいから早くなさい！」
少女はジャックの言葉を聞かずに叱咤を飛ばす。
それに対し、ジャックは一瞬何か言おうとするが……
止めて、小さく「申し訳ありません」と言い、杖を持っていない方の右手をゆっくりと花梨に向けた。
「さて……これから貴女に見せるのは、このままだとなってしまう未来ですわ。とくとご覧あそばせ」
逃げるべきだったのだろう。
だが、その前にジャックの右手が光を放ち──世界が変わった。

弾は走る。
学校を出てすぐに、また弱い『力』を感じた。感じた場所は先程と変わらない山の中。
急がねば花梨が危険かもしれない。
だから走る。
本気で走るために、今は昼間でも全く人通りのないところを通っていた。
まだ午後一時を過ぎたところなので辺りは明るいが、弾はまだあまり土地勘がない。
山に入ったらヘルメスの能力で花梨を探そうかと思っていた矢先。
タンッと軽快な音が聞こえた。音の聞こえた方を振り向くが、あるのは小さな家の屋根のみ。

だが聞き違いではない。恐らくは跳ぶ時の踏切音。
そして着地音がまだ聞こえないことから推測するに音を立てた何かは
（上！）
判断を一瞬で行い振り仰げば、それはいた。
逆光のため顔は判らないが、背丈から男だろうと予想。更にその男
が両手で振りかぶっているのは薙刀。
狙いは弾しかいない。
弾は刀をヘルメスから出すか一瞬悩むが即却下。
理由としては、高い位置から振り下ろされる薙刀に刀身が耐えきれ
るか危うい上に、
十中八九、刀を構えるより先に薙刀で斬られるからである。
弾は回避を選択。アスファルトを思い切り蹴りつけ、進行方向を転
換。左斜め後ろへと跳ぶ。
直後、鳴り響いたのはアスファルトの破砕音。
見れば、弾が進行方向を転換していなければいたはずの場所のアス
ファルトが、
中肉中背の男が持っている薙刀によって砕かれている。
「ふむ。流石にこれくらいはかわしたか」
男は笑顔で独り言を言うが、それに対して弾は舌打ちを一つ。
「トレイターか？もし違うなら去れ。俺は急いでいる」
「トレイターではない。だが、悪いが去ることは出来ないんだよ…
…お嬢様に足止めしろ、と命令されているのでね」
男の回答の中にあったお嬢様という名称。弾は、同じ名称の人物を
一人だけ知っていた。
「お嬢様って……ウエンディか！？」
「そうだが」
弾は、予想していなかった事態に焦る。
敵ではないが、ウエンディが拘わったことで良いことがあった記憶
がない。
「退け、もしどうしても退かないと言うのなら……」

「言うのなら？」
「無理矢理退けるまで！」
発言と同時にヘルメスから刀を取り出し、男に向かって走り出す。
下腹部から上半身にかけてを斬るために刀を右手で持ち、腰の左側から斜めに斬り上げる構えを走りながらとる。
炎を使わないのは、薙刀で刀を受けるのは難しいだろうという判断からである。
男の方はどういうわけか全く構えることもせず、こちらの攻撃をただ待っているように見える。
だから斬り上げた。しかし鳴ったのは金属音。感触は肉を断つものではなく、硬いものにぶつかった感触。
この時、弾は初めて気がついた。
男の持っている薙刀はただの薙刀ではなく、刃の部分から柄の部分まで全てが金属で出来ていて、
柄の部分には妙な窪みがいくつか付いていることに。
弾の刀は、その柄の窪みの部分で受け止められていた。
男はその状態のまま、弾に向かって斬りつける。
斬りつけるコースは、弾の首をはね飛ばすコース。
更に、刀は窪みにはまったままだったので、刀を持っていた腕が捻り上げられる形となり、
上がった右手が邪魔で回避と防御が出来なくなる。
すると弾は刀を一旦手放し右手を下げつつも、横からやって来る薙刀の腹の部分に、左手で掌底を真下から打ち付ける。
下からの衝撃を受けた薙刀は軌道がずれ、弾の頭上すれすれの位置を通り過ぎた。
男は攻撃を外した瞬間、薙刀の重さを感じさせぬ程の距離をバックステップで跳ぶ。
それと、弾が掌底の衝撃で薙刀から外れた刀を拾うのはほぼ同時。
「へえ……強いね」
と、突然男が口を開いた。

「そういえば、自己紹介がまだだったね。私の名はリチャード……重力の守護者（グラヴィティガーディアン）だ。

君が弱ければこの薙刀だけでやるつもりだったんだけど——仕方がない。私の『力』で君の動きを封じさせて貰うよ」

言い終えると、リチャードは右手の平を弾の方に向けた——瞬間。

弾の身体全体が急激に重くなった。

その重さは、刀を地面に突き刺さねば自分を支えきれない程の重さ。

「がっ!?　これ……は……重力変化か……？」

「御名答。君の周囲2mに強力な重力場を作らせて貰った。戦うどころか、動くこともままならないはずだよ」

全ての『力』に言えることは、小さく弱い『力』よりも大きく強い『力』の方が扱いが難しく、体力の消耗が激しい。

刀を杖のようにして辛うじて立っている弾は、リチャードの声を聞きつつ思考を巡らせる。

普通の状況ならば、相手の体力が尽きるまでこちらが粘ればいいのだが……

恐らく今、花梨はウエンディと会っているし、『力』を感じた以上、そんな悠長なことは言っていられない。

ならばどうするか。

扱いが難しいものを扱うには集中力がいる。当然、集中力を乱せば力も自然と弱くなり——

（この重力場から脱出出来る……か）

思考がまとまると、相手の集中力を乱すために口を開く。

それと同時。先程までとは比較にならないほどの強い『力』を山の方から感じた。

「!?」

驚き、顔を見上げると、リチャードも驚いた様子で、こちらに背を向けて山を見ている。

チャンスだと弾は判断して

（今なら……）

地面に突き刺していた刀を一瞬で抜き、相手に向かって突く。
届く距離ではない――が、刀の先から炎を出した。
「穿て、炎槍！」
刀の先から高密度の炎の槍を撃ち放つ。
相手は驚いた表情のままこちらを振り向き――笑った。
支えを一つ失って倒れていく弾は、それを見て笑い返す。
（簡単にかわせると思って油断している……それじゃあこれでどうだ？）
「裂けろ」
弾の声に反応するように、炎の槍に16個の亀裂が入り、1本の槍が32本の矢に変わる。
「――！？」
それを見たリチャードの顔は、今度こそ驚愕の顔に変わった。
矢が全身に突き刺さる直前、リチャードは辛うじて得物の薙刀を高速で回転させ壁のようにした。
炎の矢は薙刀が起こす風によって勢いが弱まり、薙刀に衝突して消滅。
しかし、それでよかった。
リチャードが驚き焦ったため集中力が乱れ、重力場はまだ残ってはいるが、最初の1／3くらいの重さになっている。
弾はその隙を見逃さなかった。
倒れそうな身体を無理矢理起こして、走る。
一歩……二歩……三歩目で、重力場から脱出。
ようやく元々の身体の重さに戻り、そのまま弾は走る。
リチャードは既に薙刀の回転を止めて、しっかりと構えていた。
弾は刀を横に一線させ、そこから炎を発射。更に後を追うように高く跳躍する。
それに対し、リチャードは軽く身を伏せて炎をやり過ごし、
真上から弾が振り下ろしてくる刀を防ぐために薙刀を頭上に構えた。
刀を柄の窪みの部分で受け止めて、先程の火の矢を防いだ時のよう

に薙刀を回転させ、弾の身体を弾き、
相手の身体が壁か地面に叩きつけられたら、今度こそ重力場で動きを封じよう。
リチャードはそう考えていた。
さっきは突然槍が飛んできたり、槍が矢になったため焦って集中力を乱し、
そのおかげで弾を重力場から逃がしてしまった。だが、二番煎じは通用しない。
次に重力場で動きを封じれば、お嬢様からの連絡があるまで待機することくらい出来る、とも。
だが考えは一撃目から外れた。
弾は空中で刀と薙刀が触れる直前、刀を手前に引いたのだ。
一瞬、火花が散るがそれだけで、弾の身体と刀は地面に吸い寄せられるように落ちていく。
両足が地面に着くと、一瞬足を曲げて着地時の衝撃を緩和させ、勢いを利用してバネのように足を伸ばし、刀をリチャードへと突き出した。
それは一秒にも満たない間に行われた。
リチャードは、薙刀を頭上に構えていて防御が出来ないため、身体を大きく捻ることで攻撃を回避する。
そして手首を回して薙刀で弾を斬ろうとした――が、既に弾が懐に飛び込んできていた。
直後。
感じたのは下腹部への鋭い痛み。
「っ……」
こちらを殺さないために峰打ちをしたのだろう。血が出ている様子はなかった。
リチャードは追撃をかわすため痛みを堪えて高く、後方へと跳躍する。
弾は後を追わずに、その場で野球選手のように刀をフルスイングし

ながら叫んだ。
「なぜウエンディの命令に従う！？」
刀から今までで最大級の大きさの、最大級の火力を持った炎弾が発射された。
炎弾は真っ直ぐリチャードへと突っ込んでいく。
「契約をしているのさ。お嬢様の『力』で私の失った記憶を取り戻して頂く代わりに、
私はお嬢様に服従するという契約をね！」
未だ空中にいるリチャードは、返答をしつつ炎弾の対応をした。
自分の真下の空間に、重力場を作るという対応を。
それによりリチャードの身体は真下に落ち、頭上を炎弾が通り過ぎた。
そして着地。だが、違和感がある。着地に、ではない。何もないことに違和感がある。
理由は前を見てすぐに判った。弾が刀を片づけていたのだ。
「どうした？諦めたのかい？」
リチャードが不審に思って声をかけると、弾は舌打ちをして
「違う。戦う必要性が無いことに気がついた」
「必要性が無い？どういうことかな？」
「リチャード。あんた、ウエンディに騙されてる」
数秒の空白。
リチャードは混乱していた。
騙されている？誰が誰に？私がお嬢様に？何について？……契約について？
思考がうまくまとまらない。しかし、口は開いていた。
「……根拠は？」
「GTS時代に、ジャックから聞いたことがある。記憶と精神とは別だから、記憶を作ったり取り戻したりは出来ない、と」
弾の説明を聞いて、リチャードは唖然とした。それでは記憶が戻らないではないか。

この15年間ずっと、記憶を取り戻すために世界各地を放浪して、少しでも可能性があることにすがりついてきたのに。
だが、今まで何度もこんなことがあったからだろうか。
怒りは湧いてこなかった。感じるのは悲しさと精神的疲労のみ。
「なる程ね……確かに、それが本当ならば契約は成り立たない。戦う必要性は無いってことになる……か」
「……疑わないのか？俺を」
「よくあることだからね。君に着いていって、執事さんとお嬢様に本当のことを聞くよ」
弾は案外あっさりと決着がついたので少し拍子抜けしつつも、リチャードと共に山へ向かって走り出した。

第二話：第三章：傷心

静寂に包まれた林の中。
道無き道を進みつつ、弾は花梨を。リチャードはジャックとウエンディを探していた。
「クソッどこにいるんだ……」
弾が山に入ってから幾度となく言っている台詞を吐いた時、リチャードは小さな声を聞いた。
「弾君、声が聞こえるよ。女性のものだ」
リチャードの言葉を聞くと、弾は口を閉じて耳を澄ませ――声のした方へと走り出した。
声の持ち主はすぐに見つかった。
花梨が一際大きな樹木の傍で、しゃくり泣いていたのだ。
その周囲には、花梨の感情を表すかのように大量の火の粉が飛び交っていた。
弾はその姿を認めるとすぐに、火の粉を気にせず花梨の近くまで走り寄っていった。
「花梨、何があった？」
「弾が……弾が……たし……いで……」
花梨の声は震えていて、今にも消えそうな声だった。
余程怖いことがあったのだろう。顔色も悪い。
弾はそんな花梨を慰める意味を込めて、そっと花梨を抱き寄せた。
「大丈夫、落ち着け。俺はここにいるから」
優しく、そして強く抱かれて、ようやく花梨は弾がいることに気がついた。
すると花梨は泣きやんで、ゆっくり顔を上げて弾の顔を見て
「弾、生きてるの……？よかった……よかったよう……うわーん」
また泣き出した。しかし、それと同時に、周りの火の粉も一気に消える。

幼子のように涙を流す花梨に、弾は再度疑問を投げかける。
「何があったんだ？」
「ひっく……何となくこの林の中に入ったら、変な女の子とおじいさんに会って……」
やはりウエンディとジャックだ、と弾は思うが、そのことは言わずに先を促す。
「うん……なぜか女の子は私のことといろいろ知ってて……こっちが何も言ってないのに会話が進んでいって……
ひっく……女の子の質問に答えたら女の子が怒って……
おじいさんの手が光って……弾が私を護ろうとして死んじゃう夢を……」
それで泣いていたのか、と納得する一方で、
自分が死んだだけなのにここまで泣いてくれる少女のことをありがたく、そして愛おしく感じている自分がいた。
だから更に強く、もう離さないように弾は花梨を抱き締めた。
花梨の髪からするシャンプーの匂いが鼻腔をくすぐり、柔らかい肌の弾力が抱き締めている腕を押し返してくる。
「ひっく……ひっく……」
未だ花梨は泣いていて、その身体は震えていた。
「悪かった」
全て自分のせいだと思ってそう言うと、花梨は首を横に振り
「ううん……別に弾は――」
「いや、俺が馬鹿なこと言わなきゃ問題無かったし、花梨が学校出た後すぐに追っていれば――悪かった」
「あー……良いムードのところすまないんだが……」
と、言いにくそうに言ったのはリチャード。
「この近辺にはもういないみたいだから、お嬢様が行きそうなホテルとかに行くことにするよ」
「ああ、そうか……探すの手伝おう」
完全に存在を忘れていたお詫びの気持ちも込めて言った弾の言葉に、

リチャードはチラッと花梨の方を見て
「いや……多分平気だろう。これでも一年と三ヶ月、一緒にいたんでね。
それに……弾君のマスターは弾君に一緒にいて欲しいみたいだしね」
花梨は、リチャードの発言に肯定も否定もせずに顔を少し赤らめて、しかし弾が花梨の背中に手を回すことを止めても、弾の身体に抱きついたまま離れようとしない。
「悪いな。ウエンディとジャックの居場所が判ったら、俺にも教えてくれるか？
俺もあいつらとしっかり話し合う必要性があるみたいだからな」
「判ったよ。……それじゃあまた。弾君、『力』が暴走しないようにちゃんと護ってあげなよ？」
言ってリチャードは軽く右手を挙げて、林の奥へと歩み去っていった。
完全にリチャードの姿が見えなくなってから、弾は口を開けた。
「……帰ろうか」

家の玄関をくぐると花梨は、着替えてくるね、と笑って自室に入っていった。
だが、既に泣きやんではいたが笑みには力が無く、無理をしていたのが簡単に判る。
感情が面に出やすいんだな、と弾は思う。
判りやすくて良いのだが、相手を安心させたいという気持ちだけの笑みを見て、
その真意に気がついてしまうと、逆に不安をあおられるし、やるせない気持ちになってしまう。
そして次に感じるのは、やはり花梨にそんな表情をさせてしまった自分自身への怒り。
一週間前に誓ったことは口だけだったのか？しばらくは安全だと思っていたのか？

花梨を追わなかったのはどうでもよかったからなのか？
違う、と断言したい。したいのだが、実際はどうだったのだろう？
（……判らない）
もし花梨が死んでいたら？
（……判らない。俺はどうしたんだろうか？）
花梨のように泣くのだろうか。それとも、怒り狂って花梨を殺した奴に復讐するのだろうか。
はたまた、何も感じず次のマスターを探しに行くのだろうか。
もし、などという仮定の話は意味がないことくらい判っているが、なぜか考えずにはいられなかった。
考えて考えて、考え抜いた末に判ったのは、ただ漠然とした気持ち。
『嫌だ』という気持ちである。
しかし、今度は何が嫌なのかが判らない。
ノンシェイパーやトレイターに出し抜かれるのが嫌なのか、それともまた使命を果たせないのが嫌なのか、あるいは——。
（自分のことなのに判らないことだらけだな……）
自嘲の笑みが漏れる。
（……校内の時のように責められた方が楽だったかもしれないな）
と考えていると、目の前のドアが開いて、中から白いノースリーブのワンピースを着た花梨が出てきた。
その顔は笑ってはいるが、やはりどこか辛そうだ。
「……大丈夫か？」
「うん、平気」
まるで用意していたかのような即答。
数秒間を開けて、今度は花梨から口を開いた。
「あの……さ」
「なんだ？」
「全然判らないの……だから、教えて。何があったのかを」
……強いな、花梨は。
本当にそう思う。

普通の人間ならば、ショックなことがあった場合、現実逃避をしたりして忘れようとする場合が多い。
だが花梨はそれをしない。逃げずに、真正面から現実を受け止めようとしている。
俺はここまで強いのだろうか――。
思考の迷路に飲み込まれそうになったので考えることを止めて、頷く。
「俺の判る範囲で教える。……とはいえ、どこから話すべきか……」
手を口元に当てて、考える。
花梨に余計なショックを与えないように、必要のない部分は削り、使う言葉を選ぶ。
言うことが決まると、もう一度頷き、話し出す。
「花梨が会った女は、ウエンディ・ディサイアー。精神の支配者（マインドマスター）だ。
そして男の方は、ジャック・リライアブル。精神の守護者（マインドガーディアン）だ。
花梨は『何となく』林に入ったと言っていたが、それは多分違う。
ジャックの精神操作（マインドコントロール）で、林の中に誘導されたんだ。
マインドコントロールされると、自分の思考で動いているようで、相手の思い通りに動いていたりするんだ――」
「ねえ弾」
花梨が説明を遮った。
弾の説明では、合点のいかない部分があったのだ。
「私が林の中に行った理由はそれで判ったけど……それだと、女の子が私のこと知ってたりとか、
何も言ってないのに会話が進む理由にはならないよ？
精神って言うくらいだから、考えてることを読まれたのかもしれないけど……
マスターは、自分の力使えないんだよね？　なのにどうして、マスターのウエンディがいろいろ知ってたりするの？」
「ああ、そのことは今から話そうと思ってたよ。確かに、何も言ってないのに会話が進むのは、思考を読まれたからだ。

まあその時考えてること以外は判らないらしいが……
あの二人は、まずジャックが相手の思考を読み取る。
次に〈通信具〉──ヘルメスのような物のことだが──の能力で、読み取った情報を即座にウエンディに伝達。
という風にして、ウエンディが常に相手の考えていることが判るようにしているんだ。これで理由が判ったか？」
うん、と花梨が頷くのを見ると、弾はもう一度口を開く。
「ウエンディが怒った理由を俺は知らないが……花梨が見た夢ってのは、多分強力な暗示を花梨にかけたんだろ。
俺が死ぬ夢を見る、という暗示をな。実際は見てないはずだが、『見た』と思わされてるんだ。
だから──気にするな。所詮は夢だ。現実とは違うし、重要なのは現実の方なんだからな」

人の足音、話し声、車のクラクション音。
それら町の喧騒を聞きつつ、リチャードは歩いていた。
「さてさて……まずはあそこかな」
独り言を漏らしつつ向かう先は、町一番の高級ホテル。
「あそこにいなけりゃ、次は高級レストラン、その次はブランド品店かな」
それなりに大きい町なので、探すのには手間が掛かりそうだと思いつつもホテルの中に入ると──いた。
どうやらフロントでチェックインを済ませていたらしいが……
(行動を読みやすい人だな)
少しあきれながらも、リチャードは近くに寄って声をかける。
「お嬢様、執事さん。見つけましたよ」
振り向いたウエンディは意外そうな顔をして
「あら……早かったんですのね。まあ時間稼ぎとしては十分でしたけど」
「そんなことよりお嬢様。弾君に教えて貰ったんですが……

お嬢様たちの『力』では、記憶を取り戻すことが出来ないというのは本当なんでしょうか？」
まあ、とウエンディは口に手を当てて
「弾様が言ったのは間違いじゃありませんけど……取り戻す可能性はありますわよ」
「どういうことです？」
「精神的ショックで記憶を閉ざした場合、私たちの『力』で取り戻しやすい状況にすることが出来ますの。
その状態ですと、ちょっとしたショックで記憶を取り戻すことがあるんですすわ」
なるほど、とリチャードは思う。
確率はそこまで高くはない……が、また一人に戻って探すよりは余程高い確率なのだろう。
「それじゃあ、契約は成立ですかね……何かすることあります？」
「今は特にないですわ。私の身に危険が迫った時に護ってくれれば、それで十分ですわ――ふふ、今夜が楽しみ」
「今夜に何かあるんですか？」
リチャードの問いに、ウエンディは笑みを大きくして
「弾様に暗示をかけて、既成事実を作ってしまうんですの。あの女とそこまで親しくない今の内に、ね」
「m，miss！？」（お、お嬢様！？）
ウエンディの発言に余程驚いたのだろうか、珍しくジャックが英語を使った。
それに対し、日本では英語を使うなと言われていたウエンディが不機嫌な顔になる。
「何ですの？それとジャック、貴女は自分が出来ないことを人にさせるのですか？」
「申し訳ありません……それより、既成事実というのは……」
ああそのこと、とウエンディはクスッと笑い
「大したことはしませんわ。キスするだけですのよ？

本当はもっと先まで突っ走って暴走してしまいたいのですけど……
そんな姿、いくらジャックでも見せられませんしね」
前半部を聞いた時点でジャックは目をカッと見開き、後半部は耳に入ってもいない様子で
「キキキキキキキス！？お嬢様、お止め下さい！」
「you are annoying, a layman is watching you.……And it's already benned decided.
Mr. Dan probebly will refuse since he's shy,
but that time Jack, the lady will light the fire on Mr. Dan from shadow.
Not to break the atmosphere please dont come around for 5m friom me and Mr. Dan」
(五月蝿いですわね、俗人が見ていますわ……それに、これはもう決めたことですの。
弾様はシャイだから多分拒むと思いますけど、その時はジャック、貴女が弾様に火をつけるんですのよ。物陰から。
雰囲気を壊さないためにも、今夜は私と弾様との半径５ｍ以内には近寄らないで頂戴)

夜。

一週間ほど前に、激戦が繰り広げられた私有地で、二つの影が向かい合っていた。
片方は相手を睨むように見ているが、もう片方は嬉々とした目で相手を微笑みかけるように見ていた。
睨んでいるのは弾。微笑みかけているのはウエンディである。
二人がお互いの姿を確認してから数秒、沈黙が流れていたが、弾が

沈黙を破った。
「……ジャックはどこにいるんだ？　それと、今回は何を企んでいるんだ？　ウエンディ」
「ジャックは邪魔なので、少し離れた場所に待機させてますけど……企むだなんてそんな、何も企んでなどおりませんわ。弾様と楽しい時間を過ごしたいだけですのよ？」
そう言って、ウエンディは妖しく笑う。
絶対ろくなことが起こらないな……と弾は思うが、顔には出さずに
「それじゃあ、花梨にあんなことをした理由は？」
花梨、という単語が出た途端、ウエンディの眉尻が一瞬だけ吊り上がり、すぐに元通りになった。
「あの女でしたら、変な勘違いを起こさないように釘を刺しておいただけですわ。
それより弾様、あの女をＧＴＳに預けたらどうですか？　あ、それかマージするというのはどうでしょう？
あんなの、居ても居なくても大差ないでしょう？　というより、むしろ戦闘の邪魔になるのではありませんか？」
ダメだ、とすぐに弾は答えた。
「ノンシェイパーに襲われた際、花梨の助言が無ければ俺はやられていた。役には立つ」
ウエンディは驚いた。弾の発言の後半ではなく、前半で。
「そんな……弾様がたかだかノンシェイパーにやられかけるなんて……『色違い』だったんですの？」
弾は頷き
「ああ。しかも二匹いて、両方だった……まあこっちは大した理由じゃない。
実は——花梨は〈ピキュリアー〉だ」
ウエンディが口を開けて静止した。
一秒……二秒……三秒経って、ようやくウエンディは声を出す。
「ピキュリアーだなんて……伝説だとばかり思っていたのですけど

……実在していたなんて」
「最初は俺も驚いたさ。……まあそういうわけだから、花梨は俺が護る。邪魔はするな」
弾が最後に付け足した一言を聞いて、ウエンディは先程の驚きも忘れ、小さな怒りを覚えた。
どうして自分ではなくあの女が弾の適合者なのか、という疑問と共に。
急がなければならない。既成事実を作ってしまえば
（――こっちのものですわ）
「弾様、あの……実はお願い――」
「嫌だ」
ウエンディは目を点にした。
「私……まだ何も言ってないのですけど？」
「嫌だ。ろくなことじゃない」
何かを言い返そうと思って――止めた。
止めた代わりに、通信具を使ってジャックに命令を下す。
【ジャック。強めのマインドコントロールをなさい】
ですが……という躊躇いが伝わってきたが、早く、と急かすとジャックは黙って『力』を使った。
途端、弾が少し虚ろな顔をして、焦点の合っていない目でウエンディを見た。
ウエンディは、もう心配は無い、という風にゆっくり目を閉じた。
弾の息が少し顔にかかる。

どうやら寝ていたらしい。
弾に今日あったことの詳しい説明を聞いた後の記憶が無いのだが、自室で寝ていたことから弾が運んでくれたのだろうと判断。
寝る前は外は明るかったはずだが、今ではもう真っ暗である。
時計を見ると、短針が１２、長針が４の位置を指していた。
もう一度寝た方が良いかと思ったが、寝過ぎたせいでそういう気分

にはなれなかった。
頭がボーッとして、身体もダルい。
気分転換が必要だな、と思い花梨は自室を出た。
花梨の部屋は二階で、リビングは一階。
花梨の部屋から階段へと向かう途中には、（今は弾が使っているが）父親の部屋がある。
その父親の部屋のドアの隙間からは、光が漏れていた。
弾は何をしているのか、何となく気になって、隙間から部屋を覗く
……が、誰もいない。
（……下でＴＶでも見ているのかな？）
階段を下りていくが、何の音も聞こえない。
念のためリビングに入り、中を見渡すと――机の上に、料理が置いてあった。
更にお皿の近くには、置き手紙が置いてある。
見れば、書いてあるのは八文字だけだった。
『起きたら食っとけ』
思わず笑みがこみ上げてくる。
優しいな、と思う。お礼を言わなきゃ、とも。
そういえば、さっきは慰めてもくれた。
（私も何かしてあげたいな……何をすれば弾は喜ぶんだろう）
気になる。
本人に聞こうか悩むが、恥ずかしいし、その本人もいない。
（あれ……そういえば、弾はどこだろう？）
辺りを見渡すが、いない。トイレにも、風呂場にもいない。
では、どこに？
（――）
嫌な予感が胸を過ぎった。
杞憂で終わればいいんだけど、と考えつつ、ヘルメスに強く望む。
弾の居場所を教えて、と。
すると頭の中に、この近辺の鳥瞰図が浮かび上がった。

使い方はもう判っている。
弾の居場所を知りたいという気持ちにのみ集中するだけだ。
だから花梨は集中した。
少しずつ見える範囲は狭まっていき、最終的に特定された場所は——一週間前に戦場となった私有地だった。
しかも、弾が動く気配はない。
ただの散歩といったものではないのは明らかだった。
何をしているのだろう、という疑問は浮かんでこない。
浮かんでくる前に、家を飛び出したからである。
夜の涼しい風が頬を打ち、街灯と月の光が夜道を照らしている。
花梨は走った。
足がまだ少し痛むが、それさえ無視して。
進む道は、一週間前に通った道と同じ道。
(……弾は私を慰めて、助けてくれた。今度は私の番だよね)
そう思って、走る速度を上げる。
「私……まだ何も言ってないのですけど？」
「嫌だ。ろくなことじゃない」
(あの女の子と弾だ……！)
声が聞こえたのと、二人の姿を確認できたのは同時だった。
二人の前に出て行くべきか、様子を見るべきか。
花梨は後者を選び、足を止めた。
弾の拒否の後、数秒の間が開き——一人が動いた。
ウエンディが少し顎を上げて、キスをせがむように目をつぶったのだ。
すると弾は一歩一歩、ウエンディとの距離を詰めていく。
そして二人の距離がほぼ0になると、弾はウエンディの期待に応えるかのように、
自分の顔をウエンディの顔に近づけていった。
これから何をするのか。
そんなものは明白である。

ただ、これは弾の意思ではない、直感で花梨はそう感じた。
弾の口調からして、ウエンディとそんなことをする仲ではないはずだ、と。
しかし、弾の意思ではないにしろ、このままではやってしまう。
そのことに花梨は、胸を締め付けられるような圧迫感を覚えた。
弾とウエンディの顔が近づくにつれて、それは増してくる。
お互いの唇まで３ｃｍを切った時、ついに花梨は耐えられなくなり、叫んだ。
止めて、と。

弾は悩んでいた。
キスをしろ、と言う自分がいる。
またそれと同時に、キスなんてするな、と言う自分もいる。
マインドコントロールされている。そのことは理解出来た――が、どちらが本当の自分の思考なのか判らなかった。
他のことを考えれない。今までの自分に関することを思い出すことすらだ。
つまり、今までの行動から判断することが出来ない、ということだ。
（……マインドコントロールがここまで強力なものとは）
焦る。
早くしないと後悔してしまう気がするからだ。
それすらも、マインドコントロールされているから感じるものなのかもしれないが
（――結論が出ないのならば、こっちは従っても問題無いだろう）
問題なのは、するか、しないか、だ。
Ｄｅａｄ　ｏｒ　Ａｌｉｖｅ（生か死か）というほどまでの選択ではないにせよ、間違った選択をしてしまったら後悔する。
なぜ後悔するのかは判らないが、確信めいたものが胸の内にあった。
（どうするか……）
不意に、ウエンディが動いた。

目をつぶって、明らかにキスを待っている状態。
自分は判らないが、少なくとも相手は望んでいる。
そのことに罪悪感を感じ、決心をしてウエンディとの距離を詰める。
距離は四歩で埋まった。ウエンディとの身長差は約１０ｃｍ。
腰を屈めてその差を埋めていく。焦らすように、ゆっくりと。
ウエンディの少し紅い唇まで残り僅かという時、声が聞こえた。
それは聞いたことのある声。
先程思い出そうとしたが、思い出せなかった声。
今は居候という形で住んでいる家の持ち主の声。
スポーツは得意だが、勉強が全く出来ない人の声。
自分にとって重要な、大切な人の声。
その声を聞いて、一気に意識が覚醒した。
覚醒と同時に、弾は身の危険を感じてバックステップ。
目を見開ければ、ウエンディが驚愕の表情を、花梨が安堵の表情をそれぞれ浮かべている。
「ジャック！これはどういうことですの！？」
真っ先に口を開いたのはウエンディだった。
ウエンディの問いに、姿の見えぬジャックの声が返ってくる。
「抵抗力が上がって、マインドコントロールを受け付けなくなった模様です。
もう一度マインドコントロールをかけるのは難しいかと」
「――」
返答を聞き、ウエンディは口元を痙攣させながら花梨を睨んだ。
しかし花梨は動じず、悠然とした態度でウエンディを睨み返し
「どうして、こんなことするの？ウエンディが弾のこと好きなのは何となく判るけどさ……間違ってるよ」
「間違ってる？この私が間違っているですって？どこが間違っていると――」
まるでその言葉が来るのを知っていたかのように、花梨は皆まで聞かず再度声をあげる。

「だってそうでしょ？　相手の意思を無視してキスするなんて……おかしいよ！
こんなやり方でキスして弾を傷つけて……何が楽しいの？」
それに、と一呼吸入れて
「ジャックさんもよ！　どうしてウエンディを止めようとしないの？
貴女、私に夢を見せる前に言ったよね？　申し訳ありませんって……
それって、間違ったことだったって理解してたってことでしょ？
なら、どうしてウエンディを止めないの!?」
ウエンディは俯き、口を開こうとはしない。
ジャックもまた、口をつぐんでいる。
答えないのかと思っていた矢先――意外な方向から解答が聞こえた。
「お嬢様の考えていることは存じ上げませんが……執事さん、貴女がお嬢様を止められない理由は、
『例の事故』のせいではないのですか？」
声がしたのは後方。
振り返ればそこには、いつの間にかリチャードが佇んでいた。
「例の事故って……？」
花梨の問いにリチャードは頷き
「執事さんから一度聞いただけの話なんですがね。昔、お嬢様が非常に幼かった時に一度だけ、
執事さんがキツくお嬢様を叱ったことがあったらしいんです。
その時にお嬢様が泣いて屋敷を飛び出して……すぐ戻ってくるだろうと放っておいたらしいんですが、
何分か経つと不安になって、後を追い掛けたんだそうです。
所詮は子供と大人、すぐにお嬢様は見つかったらしいんですが……
お嬢様は執事さんを発見すると逃げようとして道路に飛び出して、
軽自動車に撥ねられたそうです」
車に撥ねられた。
そんなことがあったと本人は知らなかったらしく、ウエンディは顔をあげて眉をしかめて

「それで、私はどうな――」
「続きは……私がお話しましょう」
ウエンディの言葉を切ったのは、死角だった塀の影から出てきたジャック。
ジャックの顔は辛そうで、悲しそうで、それでいてどこか腹立たしそうだった。
「奇跡的に、お嬢様はいくつかのかすり傷を負っただけで助かりました。
ですが、あれは運が良かっただけ。もし今後、同じようなことがあれば、お嬢様は死んでしまうかもしれないのです。
旦那様は許して下さいましたが……私は自分を許せませんでした。
ですから、私は決めたのです。何があっても、何を犠牲にしてでもお嬢様を護ろうと。
例えお嬢様がどんなに間違っていようと、
お嬢様が心から決めたことには従い、あの日と同じ過ちは起こさないでおこうと。
長年ディサイアー家に仕えてきた執事として。お嬢様の適合者であるガーディアンとして……」
花梨はジャックが言い終わったのを確認すると、感想を一言で言い放った。
馬鹿みたい……、と。
端から見れば残酷な台詞だったろう。
しかし、ジャックはそれを聞いて首を縦に振った。
「えぇ、馬鹿でしょうとも。あの時お嬢様を叱らなければ――」
「勘違いしないで」
花梨は凛とした声で、ジャックの発言を止めた。
「私が馬鹿みたいって言ったのはジャックさんがウエンディを叱ったことじゃなくて、
ジャックさんのその後の決意に対してよ」
言った途端、ジャックが眉をつり上げて叫ぶ。

「私の決意が馬鹿みたいですと!?……っし、失礼。では、教えて頂きたいものです。私が取った決意よりも良い方法を」
簡単よ、と花梨は言った。
「止めたらいいじゃない。ウエンディがしようとすることを。ジャックさんが少しでも間違っていると感じたなら」
反射的にジャックが叫ぶ。
「もし止めて、また同じことが――」
「起きないわよ」
花梨は断言した。
だって、と付け足し
「その事故が起きてから何年経っているの?人は成長するわ。叱られて、泣いて、逃げて、事故に遭うような年なの?そんなことにはならないと断言出来ないのであれば、ジャックさん、それはウエンディに対する裏切りよ。
信じてあげないと……ね?
それに、そろそろ自分を許してあげてもいいじゃない。
たった一度の失敗でしょ?人間だもん、失敗くらい誰だってするじゃない」
「我々ガーディアンは人間では――」
「人間だよ!」
今度は花梨が反射的に叫んだ。
「確かに傷の治りは早いし、身体能力は凄いし、不思議な力もあるけど……それが何?
私は弾と出会ったばっかりだけど、弾の人間らしいところをいっぱい見てきたよ?
楽しければ笑うし、腹が立てば怒るし、痛ければ痛がるし――人間だよ。
さっきジャックさん、叫んだよね?叫んだ後に、叫んだことに対する謝罪もしたよね?
それって、自分の感情を制御しきれなかったからでしょ?

……なら、やっぱり人間だよ。少なくとも、私はそう思うよ」
ジャックは息を呑んだ。
自分の半分も生きていないような少女に諭されて、納得している自分がいるからである。
(この子には……適いませんな)
「判りました。私は、貴女が私たちを人間だと信じて下さる限り、私自身を許しましょう。
そして、お嬢様が間違ったご決断をなさった場合、私はお嬢様を止めましょう。
ただ、勘違いが無いように先に申し上げておきます。
私は永遠にお嬢様の味方です。何があっても、これだけは真実です」
前半は花梨という少女へ、後半はお嬢様へ向けた言葉。
それを知ってか知らずか、花梨とウエンディはゆっくりと頷いた。
頷き、花梨とウエンディの視線がぶつかる。
花梨はさて、と言って仕切り直し
「ウエンディ、さっきの質問に答えて頂戴」
聞いて、ウエンディはあらあら、と言った。
「私は逆に貴女に問いたいですわね……どうすれば間違いを正せますの?
ジャックに言ったように答えてご覧なさい」
花梨はきょとんとした。
ウエンディは気が強そうなので、凄いことを言われると覚悟していたからである。
「答えられないんですの?でしたら――」
「こ、こういうことに『力』を使っちゃダメ!」
深呼吸を一回。
「キスとかそういうのは、お互いがしてもいいって思った時以外はしちゃダメ。
私に言えるのはそれくらいね」
するとウエンディは、そう……、と言って

「それなら、そうしますわ」
「えっ……」
花梨はまたきょとんとした。
（まさか何も言い返さないなんて……）
「何か不服でも？貴女の言ったとおりにするだけですのよ？」
花梨はビクッと一瞬震え、両手と顔を左右にブンブン振りながら
「い、いや……不服なんて無い無い。……うん、無いよ」
「じゃあこれで、万事解決しましたわね？……帰りますわよ、ジャック、リチャード。
夜更かしはお肌に悪いから、急いでホテルに戻らないと」

弾と花梨は呆然としつつ、去っていく三人の背を眺めていた。
「ねぇ弾、ウエンディってあんなに物分りがいい人だったの……？なんか第一印象と全く違うんだけど……」
三人の姿が見えなくなってからした花梨の質問に、弾は力なく首を左右に振る。
「普段とは全然違うな……。きっと何かに取り付かれたか、ろくでもないこと考えてるかのどちらかだろう」
「それって、どっちに転んでも悪いこと起きる気がするのは私だけかな？弾」
花梨の予想に弾は肯定も否定もせず、ただ溜め息をついた。

ホテルへの帰路についたリチャードは、疑問に思っていたことを声に出す。
「お嬢様が何も言い返さないとは珍しいですね……何か考えていらしたのですか？」
「私、負けると判っている勝負はしませんの。ジャックを言いくるめられるような相手に、口では勝てないでしょうから。
でも、女としての勝負で負ける気はしませんわ。
『力』を使わずとも、顔、性格、財力、全てにおいて私が勝ってま

すし、何より胸。
あの女、ＡＡでしょう？私はＣ。こんな条件なら１００人中１００人が私を選びますわ」
返ってきたのは余裕宣言。思わず苦笑をしてしまう。
（林の中であったことは言えないな……）
「お嬢様」
不意に、ジャックが声をあげた。
「リチャード殿との契約期間は一年半。現在深夜を過ぎてますので、明日で残りが２ヶ月となります」
一旦区切ったジャックに、ウエンディはそれで？と先を促す。
ジャックは、はい、と答え
「記憶を取り戻しやすい状況にする場合、個人差はあるのですが最長で約二ヶ月かかりますので、明日からリチャード殿の記憶復旧作業を行ってよろしいでしょうか？」
それはあまりに唐突な、それでいてずっと待ち望んでいた提案。
その提案は、好きになさい、という一言で簡単に許可された。

第二話：エピローグ：迷惑

「花梨ー今日家に行っていい？」
舞からの突然のお願い。弾がいるので、何か適当な理由をつけて断ろうとした矢先。
舞の頭頂部に広辞苑が振り下ろされた。
「あうっ！？」
舞は気を失ったかのように倒れ、しかしすぐに起き上がる。
「司、何で殴ったの！？ていうか、何でいつも広辞苑！？それ痛いんだよ！」
「伯父さんが来ると判ってて俺に教えなかったからだ。広辞苑の理由は、痛いからだ」
この双子は（理由は知らないが）伯父を苦手としているらしく、伯父が来る時はいつも花梨の家に逃げてくる。
「だ……だって司、最近私に酷いんだもん……」
「酷くない。……まあそういうことで、悪いが家に行かせてくれ。今度うまいケーキを一つ奢るから」

「――で、承諾したのか……馬鹿か？俺にどうしろと？」
花梨は今、リビングで正座をして弾から説教をされている。
勿論理由は舞と司が家に来ることを許可したことである。
「えっと……お父さんの部屋にずっと閉じこもるとかしてくれるたりすると、
こちらとしては非常にありがたかったりするんですけど……」
最初は普通の声量だったのだが、話すにつれて弾の目つきがドンドン険悪なものへとなり、
それに比例するかのように花梨の声量も小さくなってきていた。
「ほー……そんなことをして俺に何の得があると？」
弾は笑っている。笑っているのだが、しかし目だけは笑っていない。

「そりゃあもう、私にとても感謝され……ごめん、嘘。でも、もうすぐ来ちゃうよ？どうしよう……」
悩む花梨を睨むように見て弾がもう一度、馬鹿、と言った――直後。
ピンポーン、というその場の空気にそぐわない軽い音がした。
「ききき来ちゃった！弾、文句は後で聞くから、今は部屋に早く隠れて！」
弾の返事を聞かずに、花梨は急いで朝に弾が使っていたコップやお箸、食器類を片づける。
更に玄関へと走り、弾の靴を靴箱の奥へと隠し、弾が部屋のドアを閉めた音を確認してから玄関のドアを開けた。
勢いよく開けたせいで、ドアに何かがぶつかった気がするが、気のせいだろうと無視。
ドアを開けきって、その向こう側にいたのは
「いらっしゃい、司。……あれ？舞は？」
花梨の質問に、司は無言で下を指差す。
見ればそこには仰向けで倒れている舞が。
「舞、何してるの？そんなとこで寝てたら風邪引いちゃうよ？」
優しい忠告に、舞は額を撫でながらゆっくりと起きあがり、なぜか涙目の状態で口を開く。
「花梨……私、何か花梨に恨まれるようなことしたかな？」
「まっさかー、そんなことあるわけないじゃない。さ、入って入って」
司が含み笑いをしながら、舞が何か言いたそうな顔をしながら、それぞれ靴を脱ぎ家にあがる。
リビングに入った時、舞は小さく、あっ、と言った。
「花梨の家に来るの久しぶりだけど……また模様替えした？」
舞の言葉を聞いて、花梨は満足そうに頷く。
「さすがは舞。見てるとこが違うねー。……じゃあ、どこを模様替えしたかは判る？」
「ええと……そこのカーテン……かな？」

「あー惜しい！それもなんだけどね、もう一ヶ所あって、正解はそこに置いてあったぬいぐるみを退けて、ガラス細工を代わりに置いてある、でしたー」

楽しい時間が過ぎるのは早いもの。

花梨は弾の存在などすっかり忘れて、一時間ほど舞と司としゃべり続けていた。

「だよね？あの数学教師は教師辞めるべきだよねー」

教師の悪口を楽しく言い合いながら、お茶を飲んでいると〈ピンポーン〉と不意にチャイムが鳴った。

「誰だろう？ちょっと待っててー」

駆け足で玄関まで行き、ドアを開けるとそこには意外な人物が二人立っていた。

「え……？ウエンディにジャックさん……？えっと……何か用が？」

突然で少し驚いている花梨に、ウエンディは、フッ、と笑い

「弾様に会いに来ましたの。ついでに引っ越しそばを渡すためにも」

「あ……そう、残念だけど弾はいないわ。引っ越しそばも……引っ越しそば！？」

何の冗談かと思いジャックの方を見るが、目が合うとジャックは真面目な顔で頷いた。

「ええ。この家の二件隣の小さくてみすぼらしい家が、空き屋でしたの。

ですから、少しでも弾様の近くにいるために、小さいことやみすぼらしいことを我慢して、

ポケットマネーでその空き屋を買いましたのよ」

顔色が悪くなり、冷や汗をかいているのが自分でも判る。

悪いことってこれだったのかな……と思うと、だんだん悲しくなってきた。

ジャックに引っ越しそばを渡されても、ちゃんと反応出来ないほどだ。

「まぁ引っ越しのことなんて、どうでもいいんですの。弾様、本当はいるんでしょう？私が、貴女と弾様が同棲してることを知らないとでも思って？」
「同棲！？」
驚きの声をあげたのは、いつの間にやら花梨の後ろに立っていた舞と司。
（ヤバ……二人が来てること忘れてた……）
時既に遅し、舞と司は口々に勝手なことを言い始めている。
「従兄弟じゃないってことは予想してたけど……まさかそこまで進んでるなんて！？」
「誰かに教えた方がいいかな？」
「ううん、ダメだよ！花梨と弾の生活を邪魔するなんて！」
「そうだな……。安心しろ花梨、俺らはお前の味方だ！」
「あ、でも高校生で子作りはやらない方がいいと思うよ」
「か……勝手なこと言わないで！大体子作りって、私と弾はまだそんな関係じゃないよ！」
花梨は必死に会話を止めようとするが、しかし止まらず
「『まだ』ってことは将来的にそういう関係になるのか……」
「わー！言葉の選択ミスだから軽く流してっ！」
「判ってるって、ついつい本音が出ちゃったんでしょ？安心して、応援するからさ」
「ち、違――」
「五月蝿え！」
突然階段の上から来た一喝に、その場は静かになる。
だがそれも一瞬のことで、すぐにウエンディが声を発した。
「弾様、やっぱりいらっしゃったのですね？さあ、そんな女よりも私を選んで下さいな」
言って、花梨の方を指差し
「弾様はそんなAAカップの超貧乳女より、Cカップの私を選びますわよね？」

その言葉に、弾より早く花梨が反応した。
「ちょっと、人が気にしてること言わないでくれる！？大体、胸の大きさなんてそんなに関係無いじゃない！」
「あら、判ってませんのね。これは殿方が女を見る重要なポイントの内の一つですのよ？
まあ……まな板のような胸しか持っていない貴女にとっては、酷な事実かもしれませんけど――！？」
ウエンディが驚いて言葉を切ったのは、花梨が鬼のような形相をしているからでも、
花梨が握り拳を作って震えさせているからでもなかった。
ウエンディの視線の先にいるのは花梨の顔を見て怯えている舞。
舞は空気が変わったのを悟り、視線を花梨の目から逸らし――ウエンディと目があった。
微笑を浮かべる舞に、ウエンディは何も言わず土足というのも気にせずに近づいていく。
そして手を伸ばし――おもむろに舞の胸を鷲づかみにした。
「ひゃあっ！？」「お、お嬢様！？」
舞の驚きの声とジャックの制止の声を無視して、ウエンディは舞の胸を揉みしだく。
「大きい……」
ポツリと言って数秒間黙り、ウエンディは舞を見上げながら
「何カップですの？これは……パッドを入れてるわけでもないみたいですし……」
「い……Ｅカップです」
自分よりも１０ｃｍ以上小さい少女に問いつめられて、舞はなぜか敬語で答えた。
「そういえば今まであんまり意識してなかったけど、舞って大きいよね。……何食べたらそんなになれるの？」
「私も同意見ですわ。どんな異物を食べてるのか……白状なさい！」
羨ましそうな目で舞の胸を見ながら詰め寄ってくる二人。

それに対し、舞は冷や汗をかきながら後ずさりをする。
「み……みんなと同じ物しか食べてないよー……あ、ほら、大きいと辛いことっていっぱいあるんだよ？」
舞の言葉に、二人の動きが止まった。
舞は今がチャンスとばかりに、早口で巨乳の悪いところを挙げていく。
「重たいし、肩こるし、俯せで寝れないし……水着なんか着たら、男の人が見てきてすっごい恥ずかしいんだよ？」
最後の一つで、花梨とウエンディがまた動き出した。
「男の人が見てきてすっごい恥ずかしい……？結局は自慢じゃないのー！」
「全くですわ！というより、大きくする方法を教えなさい！」
その後ろでは存在すら忘れられた男性陣が話し合っていた。
「なあ、変な仲間意識が芽生えてないか？」
弾が聞き
「確かに……」
司が頷き
「ノーコメントでお願いします」
ジャックが悲しそうにする。
「あ……舞が助けてと言わんばかりの顔でこっちを見たぞ」
「平気だ。爽やかに手を振ってやってくれ」
「た、助けないんですか……？じゃあ私もお嬢様を止めなくて――」
「お嬢様ってのは金髪の子ですか？なら止めなくて大丈夫です」
直後、舞の悲鳴が近所に響き渡った。

第三話：プロローグ：混乱

六月の中旬、とある町の交差点で一台の車が爆発・炎上した。
走行中に爆発が起きたため、火だるまになった車が信号待ちをしていた車に衝突。
更に火が燃え移り、ガソリンに引火して大規模な二次災害が起きた。
奇妙なことに、警察が調べたところ起爆装置のようなものは無く、車には何の異状も見られなかったという。
たった一度ならそこまで大騒ぎにはならなかっただろう。
だが、翌日に爆発はまた起きた。その翌日にも、そのまた翌日にもだ。
爆発が起きる地点はいつも、前日に爆発が起きた町の隣町のどこかにある交差点。
時間帯はランダムながらも、朝にはあまり起きていなかった。
原因不明の連続爆発。
それはマスコミを騒がせ、世間を恐怖の渦へと陥れた。
一部の政治家たちは、これはテロだと言った。
一部の怪しい宗教団体は、これは神の怒りだと言った。
一部の科学者たちは、これはプラズマが関係していると言った。
彼らの意見はほとんどバラバラで、唯一共通している意見が原因が判らず解決策がない、ということだけだった。

カツカツカツ・・・・・・
大理石の廊下を、のんびりと歩く。
聞こえる音はハイヒールが廊下を叩く音だけ。
周りにあるのは、鎧や壺、絵などだ。
どれも高そうなものばかりで、安くても何百万。
物によっては一つ何億かする物まであるとか。
だがここに置かれているのは、改造された物ばかり。

鎧には爆発物や監視カメラ。壺には侵入者を驚かす仕掛け。
絵に至っては小さな穴を開けて、壁の向こうから赤外線センサーを取り付けているらしい。
ここを通るたび、いつも勿体ないと思うのは私だけではないだろう。
そうこう思っている間に行き止まり。左手に部屋があるが、ドアに南京錠がかかっている。
だが、用があるのはその部屋ではなかった。
部屋の前を通り過ぎ、その奥の壁へと進む。
壁にぶつかる――ことはなく、その壁を通り抜けた。
何のことはない、ただの立体映像である。
立体映像の壁を通り抜けた先には、一つのドアがあった。軽く咳払いし、二回ノックをする。
「校長、智津子です」
返事はすぐに帰ってきた。
「ああ。入ってきてくれ」
指示に従い、ゆっくりとドアを開ける。
中は意外と狭く、机が一つと椅子が一脚、ソファー二つがあるだけだ。
椅子に座っているのは、ＧＴＳの校長。年齢は若く、４０半ばといったところか。
今はＧＴＳ内部なので校長と呼んでいるが、かなり大きい会社を数社持っている社長だ。
なかなかモテそうな顔立ちをしていて、人望も厚い。
「すまないね、本当ならば私が行くべきなのだが……」
「いえ……それで、用件とは？」
そう、ここに来たのは校長に呼ばれたからだった。
「ああ、そうだった。実はね、不穏な情報が入ってきたんだよ……〈トレイター〉が集団で行動しだしたらしい」
あまり良い用件ではなさそうだ。まあ、呼ばれた時点で予想はしていたけど……。

「それでね、今までは放っていたが、娘が心配になったんだよ。あれはワガママだが、私にとっては可愛い一人娘だ。だから、ここに戻ってくるように伝えてくれないだろうか？場所の調べはついている。秋野町、というところだそうだ」
場所は判っていて、伝言を伝えるだけなら大した仕事ではない。
ただ気掛かりなのは……
「どうして私なんです？」
「そのことなんだがね、今私の娘が迷惑をかけているのが、君の弟の弾君らしいんだよ。
だから、ついでに弾君にも伝言を頼みたいんだ。娘が迷惑をかけてすまない、とね」
そういえば、弾の名前なんて久しぶりに聞いた……。
あの馬鹿、ちゃんと〈適合者〉を見つけれたのだろうか？
「まあ、そういうことなら仕方ないですね。用件は以上でしょうか？」
「ああ。娘を――ウエンディをよろしく頼むよ」

第三話：第一章：雑談

「花梨ー、今朝のニュース見た？」
四限目終了後の昼食時間。
この時間は、ほとんどの生徒が教室でワイワイガヤガヤと騒ぎながら昼食をとる。
移動するのが面倒なのか、他の場所で食事をしに行く人があまりいないのだ。
花梨の机を取り囲む形で座っている舞たちも、移動するのが面倒なので教室から出ることはない生徒の一部だった。
「見たよー、また例の連続爆発でしょ？怖いよねー」
舞は、うんうん、と頷き
「一日おきに隣町で起きるんだけど……花梨、知ってた？運が悪いと明日には隣町、明後日にはこの町で爆発が起きるかも……ってい！」
「あ！私の卵焼き……舞、自分のがあるじゃない」
「だって、花梨が作ったのは甘くてふんわりしてておいしいんだもん。
……そうだ！花梨さ、弾にお弁当作ってあげたら？どうせ朝飯と夕飯も作ってあげてるんでしょ？」
舞の発言に、花梨がむせた。
弾は無関心といった感じで、コンビニで買ったおにぎりを黙々と食べている。
花梨は悩む。
（これはウエンディに差をつけるチャンスかな？）
でも
（また変な噂が立つかもしれないし）
けど
（毎日コンビニのおにぎりは味気ないよね……）

んー……
（弾に決めさせよっと）
「弾は……作って欲しい？」
少し上目遣いで、問いかける形で聞いた。
正直、作って欲しい、と弾が言うことを望む気持ちの方が強い。
だが、望みは次の一言によって軽々と打ち砕かれた。
「どっちでもいい」
思わず手が出そうになった。
どうして弾は……女心というものが判らないのだろう。
こんなどっちつかずな答えは一番困るというのに。
そんなことを考えていると突然、司が動いた。
弾を連れて一旦教室の隅へ。小声で何かを伝えて、すぐ戻ってきた。
司と一緒に戻ってきた弾は、少し慌てた様子で
「や、やっぱり作ってくれないか？」
司が何を言ったのか少し気になるところではあったが、弾の気が変わる前に快く承諾した。

「花梨、昼間のことなんだが……」
夕食を作っている最中、弾がおもむろにそう切り出してきた。
昼間のこと。真っ先に思い浮かんだのは
――お弁当！？
いや、まだ判らない。ここで取り乱しては……
自身にそう言い聞かせ、花梨はゆっくり弾の方に振り向いた。
「包丁握り締めたまま振り向くな。怖いから。……弁当のことじゃなくて、爆発の騒ぎのことだ」
そういえばそんな話もしていたなあ、と思い出し、花梨は包丁をまな板の上に置く。
「連続爆発事件がどうかしたの？あれは〈姿無き者〉とは関係ないでしょ？」
別に間違ったことは言っていないと思う。ノンシェイパーがあんな

ことをしても、何の得にもならないからだ。
しかし弾は首を横に振り、花梨が疑問の声をあげるより早く口を開いた。
「確かにノンシェイパーがやっているわけではないんだが……〈裏切り者（トレイター）〉というのがいるんだ。
トレイターは〈守護者（ガーディアン）〉がノンシェイパー側に寝返ったやつのことでな、
今回の連続爆発はトレイターが関わっている可能性があるから、爆発事件が落ち着くまではあまり一人で出歩くな」
「そう――ねぇ、そのトレイ――」
「弾様、ディナーを食べに行きましょう！」
突如、会話を遮って視界に入ってきたのはウエンディ。
近所の家を買ってからというもの、何かしらと理由をつけてはよく花梨の家に来ていた。
最初はチャイムを鳴らしていたのだが、ここ最近はチャイムも鳴らさず我が物顔で勝手に入ってくる。
「ダルイ、パス」
弾も口では何も言わないものの、最近は適当にあしらうようになってきている。
何も言わない理由は、相手を傷つけるのかもしれないと思っているのか、
はたまた言っても無駄と悟っているかのどちらかだろう。
（……まあ、弾の性格上、多分後者だろうけどね）
「そんなことおっしゃらずに、今日は高級中華料理店のフルコースですわよ？」
……高級……どれくらい凄いのだろう？
花梨が思い浮かべたのは、昔一度、父親に連れて行って貰った中華料理店だった。
あそこのフルコースは凄かった。
ザーサイ、チンジャオロース、エビチリのようなのに加えて、フカ

ヒレやアワビといったものが並んでいた。
特にフカヒレの姿煮の口の中でうまみを広げながら溶けていく感じは今でも忘れられないほどだ。
それで、一般的な中華料理店のフルコース。
これに高級がつくのだから、きっと見たことも聞いたことも無いくらい凄いものが飛び出してくるのだろう。
想像しただけで――
(――いけない……よだれが……)
急いで口元をサッとぬぐう。幸い、二人には気がつかれなかったようだ。
「家を出るのが面倒だ……それに」
言って、弾は台所の方を指差し
「もう夕食はほとんど出来上がってるんだ。今日はもう帰ってくれ」
キッパリと弾に断られてはウエンディも従うしかなく、
仕方ありませんわね、と小さな声で言って、肩を落として出て行った。
「ふぅ……今日はすぐ帰ったわね、この前は二十分ほど粘ったのに」
「あぁ、昨日ジャックさんが注意したらしいぞ、
最近行き過ぎだから、少しはこっちの迷惑考えた方がいいんじゃないかって」
勿論、あのジャックさんがそこまで直接言うわけがなく、少し婉曲気味に言ったのは火を見るよりも明らかである。
「へえー……ウエンディはそれになんて答えたの？」
「ああ、どういう思考回路かはよく判らないんだが……家に来るペースを落とすわけにはいかないから、
こっちが少しでも迷惑そうな素振りを見せたらすぐ帰る、だとさ」
「……それが本当なら……いや、なんでもないわ」
(こっちが迷惑そうな顔してることに、ウエンディが気がつくはずがない……か)
花梨は勝手に一人でそう納得し、料理を再開し出した。

「私どうも最近、弾様に軽くあしらわれている気がしますわ……」
（ふう……やはりすぐに帰ってきましたか……）
独り言を言いながら帰ってきたウエンディを見て、リチャードは胸中でつぶやいた。
お嬢様が弾君を誘いに行ったのは今からジャスト三分前。
この早さは今までの中で最高記録だ。
すぐに帰ってきた理由として考えられるのは、
昨日執事さんに言われたことをしっかり守っているか、
あるいは、あちらが最低でも三日に一回は家に来るお嬢様に飽き飽きしたかのどちらかだろう。
（いや……あの反応だと両方ですか）
心の中でそう判断を下したリチャードに、ウエンディの視線が突き刺さった。
一見笑っているような顔をしているが、目は笑っていないし口元は痙攣している。
ウエンディの危険信号だ。
このまま放置しておくとどんどん機嫌が悪くなって、最終的にはジャックやリチャードに八つ当たりが来る。
簡単に防ぐ方法は、機嫌の悪い原因を取り除くこと。
（まあ出来る限りの助言はしておいたほうがいいかな……）
「お嬢様は焦りすぎなんですよ」
出来るだけ笑顔で、大人の余裕というのを見せながら話す。
まるで、私はそういう経験を積んできましたよ、とでも言わんばかりに。
「自分から積極的に行きすぎなんですよ。押してダメなら引いてみろ。日本のことわざです。
たまには弾君と距離を開けてみてはいかがですか？」
「あら、知ったふうな口をきくんですのね？」
「ええ、経験者ですから。私はこれでも――！？」

不意に、頭の中をシルエットが過ぎった。
細めの、身長は１６５前後の女……誰だろうか、思い出せない。
だが、彼女と何か大切な約束をしていた気がする……なんだろうか。
（記憶が……戻りかけているのか）
約一ヶ月、〈精神の支配者（マインドマスター）〉と〈精神の守護者（マインドガーディアン）〉の力で治療して貰ってきた甲斐があったということだろう。
「記憶が戻りそうですのね？予定よりかなり早いですけど……まあ、とりあえず引くことは出来ませんわ。ライバルがいますもの」
「それでは、弾君の役に立って株を上げるのが良いかと」
「役に立つってそんなことあるとは――いいえ、ありましたわ……弾様は連続爆発事件のことを気にしておられましたわ。リチャード、連続爆発事件を調べなさい。
そしてもし、ノンシェイパーやトレイターが関わっているのなら、片づけてきなさい」
久しぶりにまともな命令だ。
この前の命令は、確か町で一番高いケーキを買ってこい、だっただろうか……？
あれは違う意味で辛かった。ケーキ一つ買うだけなのに、行列に並んで一時間半もかかったからだ。
……変なことを思い出すのに時間をかけてしまった。返事が遅いとお嬢様の機嫌は悪くなる。
「判りました。では、行ってきます」
口早にそう告げ、リチャードは最後に爆発が起こった町へと向かった。

「智津子、校長に呼ばれた理由、なんやったん？」
学食でコーヒーを飲んでいると、紗英が声をかけてきた。
紗英は〈風の支配者（ウインドマスター）〉で、自分と同い年。

昔から仲が良くて、最も親しい友人だ。
「それがねえ――」

「連続爆発事件があったのはここら辺か……」
もし、連続爆発事件がトレイターの仕業なら、ある程度近くにいれば『力』を感じることができるはずだ。
『力』を感じれば当然トレイターの位置が判り、お嬢様の命令通り片づけることが出来る。
腕には自信がある。問題は見つけれるかどうか、だ。
次の爆発で場所を突き止めるにしても、町一つ分距離が離れていて『力』を感じれるかどうか……。
それに感じることが出来たとしても、人通りの多い町中だ。
一個人を特定するのは難しいかもしれない。
動きに何らかのパターンがあるとも考えづらい。
結果として、地道に怪しい人物を見なかったか聞き込みするしかなかった。
事故があった交差点は人通りが多く、大量の花が置いてあった。
今も、一人交差点の方を向き目をつぶって両手を合わせている人がいる。
だが、聞き込みにああいう人は向いていないのは経験から判っていた。
狙うのは、毎日同じ時間にここを通る人物。
昨日爆発があったのは、１８時３０分。そして、今は１８時２６分。
（そろそろか……）
いろんな人が目につく。中学生、高校生、外人、サラリーマン、警察、老人……。
俺は外人に声をかけた。こうなれば手当たり次第だ。
「あの、昨日の爆発の瞬間、見ませんでしたか？」
声をかけた外人は男。年齢は２５前後だろう。金髪で、優しそうな顔立ちをしている。

男はこっちを見て、なぜか嬉しそうな顔をしながら、日本語で答えた。
「見ましたよ」
当たり、だ。十人に一人くらいの確率だろうと思っていたが、運がいい。
「じゃあ、爆発が起きる前、怪しい人物を見かけませんでした？例えば……爆発した車の方に手を向けていたとか」
「手……ですか……ああ、いましたいました。爆発が起こったら、すぐにそこの路地裏に入って行きましたよ。怪しかったから追いかけたんですけど、見失っちゃいまして」
これまた当たり。こっちはもっと低い確率だと思っていたが……。それに、怪しかったから追いかけたとは……余程好奇心旺盛な男なのだろう。
「警察の方ですよね？見失ったところまで案内しましょうか？」
私服警察だと思っているのか……まあそっちの方がやりやすい。
当然、警察手帳なんてもっていないが……この反応なら、見せろとは言わなさそうだ。
「では、お願いします」
男は満足そうに「はい」と頷き、路地裏へと入っていった。
急いで後を追うが、この路地裏……横道が非常に多い。
何か急ぐことがあるのか、男は小走りになっている。
ちょっと目を離しただけで、男を見失いそうだ。
「あ、そうだ。言い忘れていました」
男が走るペースを徐々に上げながら話しかけてきた。
「どうしました？」
「その怪しい男なんですけど」
男が横道に入った。
距離が５ｍほど離れていたので、一時的に男が視界から消える。
「実は」
見失ってはいけないので、急いで後を追って横道に入り――吹き飛

ばされた。
後ろにあった壁に背中から叩きつけられる。
（っ……）
「俺なんだよ」
顔を上げれば、男が笑っていた。言葉遣いが変わっている。
いや、言葉遣いを元通りに戻しただけなのだろう。
誘い込まれたのだ。人通りのない路地裏に。
狩るつもりが、逆に狩られていた。
いつの間にか、男の手の中にはハンドガンが握られている。
男は腕を上げ、照準をこちらの頭に合わせた。
今は薙刀は持っていない。こんなにすぐ見つかるとは予想していなかったからだ。
武器はこちらだけなく、相手の能力もまだよく判っていない。
非常に不利な状態だ。
ばれないように右手で石を一つ拾う。
重要なのはタイミングだ。遅すぎても、早すぎてもいけない。
男の人差し指が動いた。
トリガーを引く前に、石つぶてを放つ。
石つぶてが当たるのと、男がトリガーを引くのは同時だった。
石つぶてはハンドガンの銃口に当たり、照準がずれ、男が撃った弾丸はこちらの頭上約５ｃｍの位置に外れた。
必要なのはスピードだ。
男が次の弾を撃つより早く、近づいて取り上げるなり重力制御するなりして、ハンドガンを使えなくすることが重要だった。
だからとりあえず立ち上がろうとしたとき――大きな音を立てて爆発が起きた。
爆発が起こったのは弾丸が当たった壁。
その爆発で壊れた壁の破片が全身に降り注ぎ、爆風に身体を押さえ込まれた。
直後、パン、と乾いた音が響いた。弾丸は外れて、今度は足下の地

面に当たる。
焦っていたのか、照準をしっかりと合わさずに撃ったのだと思った。
だが違った。今度は足下が爆発したのだ。
地面はえぐれ、身体は空中に吹き飛ばされた。
今になってようやく気がついた。爆発したのは弾丸だと。
「冥土の土産に教えてやるよ」
男の声が響く。
「俺の名前はダニエル・ペリル。〈爆発の守護者〉(ブラストガーディアン)……さ！」
今度は乾いた音も何もしなかった。
だが、爆発は起きた。落下していく身体は炎に焼かれ、爆風によって地面に叩きつけられた。
地面に叩きつけられた時に初めて、爆発は自分の真上の空間で起こっていたことを知った。

「へー……楽しそうね。私も行っていい？」
「んーどうだろ……」
実際どうなのだろう。
一人で行けだとか、友人と一緒に行ってはならないとは言われていない。
ただ、交通費などは全て校長持ち。
お金持ちとはいえ、そこら辺が少し気になる。
「気にすることはないよ。どーせあの校長、１０万や２０万使われても痛くもかゆくもないんだからさ」
「うん、そうだけどね……って、私お金のこと言った？」
「言ってないけどさ、智津子って顔で考えてることがすぐ判るんだよねー」
１０年以上の付き合いとはいえ、そこまで相手の思考を読む紗英には驚かされる。
まあいつものことだったりするのだが……。
それとも、本当にこっちの顔に出ているのだろうか？

「そんな変な顔しない。それじゃ、私は用意してくるね。隼人にも来させる必要があるしさ」
「え？ あ、ちょっと……ま、いっか。私も用意しなきゃ」

第三話：第三章：記憶

「ね、話って何？」
彼女は屈託のない笑みを俺に向けてそう言った。
彼女を呼び出した理由は、その……なんだ……まあそういうことだ。
大丈夫。言える。何度も家で練習したじゃないか。
自身にそう言い聞かせ、出来るだけハキハキと、大きな声で言った。
「結婚……しないか？」
こういうことを言うのは初めてだった。
付き合い始めた理由は彼女に告白されたからだったし、自分で言うのもなんだが俺はかなり奥手だった。
もしかしたら、自分で思っているよりも小さい声だったかもしれない。
正直、二度目を言う勇気は全く無かったし、断られたらと考えると心臓がはち切れそうだった。
だがこっちの心配をよそに、彼女は笑顔のまま「いーよ」と答えてくれた。
「でもね、一つ約束して。『一生私と一緒にいる』って」
「ああ、するよ。俺は君と一生一緒にいる」
「ん、よろしい」
もう心臓の鼓動は落ち着いていた。
『一生彼女と一緒にいる』？簡単な約束さ。
そんなこと、約束しなくたってするつもりだった。
彼女がいない人生なんて考えられないし、考えたくもなかった。
突然、彼女がトコトコと近づいてきた。
目を軽くつぶって、顎を少し上げている。
いつもの合図だ。
俺はいつもするように、彼女の唇を塞いだ。

式まで後六日。
派手な式をするつもりはなかった。
これは儀式で、重要なのはこれ以降の生活。少なくとも俺はそう思っていた。
だが彼女に最初出会ったとき、まさかこういう関係になるとは予想だにしなかった。
あの時の関係は、ただのマスターとガーディアンの、適合者という関係でしかなかったからだ。
今でもあの時の彼女の顔は、ハッキリと覚えている。

式まで後五日。
彼女が、嫌な予感がする、と言った。
「式が近いから不安なだけさ」と慰めたら、彼女は納得してくれた。

式まで後四日。
夜に、ノンシェイパーが現れた。
『色違い』でもない、普通のノンシェイパー。
ハッキリ言って相手にならなかった。
恐らく、姿を見せて３０秒も経たない内に殺しただろう。

式まで後三日。
またノンシェイパーが現れた。
昨日と同じで普通のノンシェイパー。
今回は二匹だったが、結局まとめて始末した。
二日連続とは珍しい。
だが、そういう日もあるのだろうと思うことにした。

式まで後二日。
事件は起こった。
家の窓を破って、ノンシェイパーまた入ってきた。

一匹だけだったのだが、なぜかすぐに逃げ出した。
普通ならば放っておく。だが、三日連続で腹が立っていた俺は、ノンシェイパーの後を追った。
家から１ｋｍも離れていないところでノンシェイパーに追いつき、斬り捨てた。
直後、家の方で悲鳴があがった。彼女の声だ。
やってしまった。明らかな陽動に引っかかってしまった。
身体全身を重力制御で軽くして、移動速度を上げる。
一刻も早く帰らないと、彼女が……。
家に着いて、玄関で真っ先に見たものは――血だった。
俺は急いで血の跡を追った。
ルートを教えてくれている。
血の量自体は多くない。まだ生きている。血の跡が、彼女の逃げたことを教えてくれた。
少し進んで……階段を上がって……血は、彼女が寝室に逃げ込んだ
入ろう。そう決心してドアノブを回そうとしたとき、見たくないものを見てしまった。
それは、ドアと床の隙間から流れ出てくるおびただしい血。その量はさっきまでの比ではない。
もしかすると、彼女はもう……。そんな予感が胸を過ぎるが、まだ生きていることを祈ってドアを開けた――。
――中は悲惨な状態だった。
血が壁にべっとりと、ペンキのようについている。
ベッドの上には彼女が倒れていた。だが、様子がおかしい。
目を凝らすと、闇の中に紛れ込んでいるノンシェイパーが見えた。
しかも、目が赤い『色違い』。
赤眼はゆっくりと彼女に近づいていっている。
気がつけば、俺は走っていた。薙刀で赤眼を殴りつけ、壁に叩きつける。
赤眼を殴った理由はただ単に、俺と彼女との直線上にいて邪魔だっ

たからだ。
赤眼が壁に叩きつけられたとき、その衝撃で赤眼は持っていた『何か』を落とした。
『何か』とは足で、誰のかというと――。
俺は急いで彼女のそばに寄っていった。
部屋の入口からはよく判らなかったが、この距離ならハッキリと判る。
足が無かった。右手には、直径４ｃｍほどの穴が開いている。
恐らく最初に右手に傷を受けて、この寝室に逃げ込んだのだろう。
だが、追いつかれた。そして、逃げ回る彼女の足をあの赤眼が切断したのだ。
血はかなり大量に流れ出ていて、今すぐに病院に運んでいても無理だっただろう。
俺はそっと彼女の頬に触れた。予想以上に冷たい。
なんてことだろう。一生彼女と一緒にいる、と約束したのに……。
「泣かないで……リチャード」
意識があったのか、彼女は俺の方に左手を伸ばしながらそう言った。
俺はその手をぎゅっと握りしめた。
「ねえ……約束、守ってね。私を……〈吸収（マージ）〉して。そうすれば……私たち、ずっと一緒だよ」
マージ、そんな残酷な言葉を彼女から聞くとは思ってもみなかった。
確かにマスターが死にそうな場合は、マージするのが賢明な判断だ。
だけど――
「そんなこと……出来ない」
「ダメ……やって……女の最後のお願いなんだからさ……あ、でも……マージする前に……して？」
その声は擦れていて、今にも消えそうだった。
「……判った」
俺はそれ以上のことは何も言えず、最後のキスをして――マージした。

マージするのに時間はいらない。必要なのは、覚悟だけだった。
そして全てが終わり、もう動かない彼女をジッと見つめていると、
耳障りな声が聞こえてきた。
「ククッ……やーっと死んだか。お前らが俺の存在を忘れている
間に、デカイ爆弾を仕掛けさせて貰ったぜ？
爆発までは後５秒。一人なら逃げられるけど、その女の死体つれて
逃げるのにはちょっと時間が足りねえなあ……それじゃ、俺は行か
せて貰うぜ」
勝手に用件だけ告げて逃げようとする赤眼に、俺は右手を向ける。
「悪いが、お前にも付き合って貰うぞ……地獄への旅だ！」
そう言って、巨大な重力場を赤眼中心に作った。それは、今まで作
ってきた中で最も規模が大きく、最も強力なものだっただろう。
「グ……が！？」
重くなった自身の身体を支えきれずに、赤眼が床に這い蹲る。
その姿はまるで潰れた虫のようだった。
滑稽な姿だったが、全く笑うことが出来ず――爆発に呑まれた。

「……ぐ……」
身体が痛む。爆発で受けた全身火傷のせいだろう。動けないことも
ないが、動くたびに電撃が走るような痛みが全身を襲った。
（いや、それよりも……）
今のでハッキリと思い出した。
俺はこんなところにいていい存在ではないということを。
償わなければならない。ただ、今すぐにはダメだ。
思い出させてくれたお礼に、お嬢様の最後の命令はこなさなければ
……。
とりあえず、今は休もう。
最後に一仕事残っているのだから。
（もうすぐだ……もうすぐ行くよ、スー）

「隼人ー、旅行に行くし、準備しーや」

部屋に帰ってきたねーちゃんが放った第一声がそれだった。

「……は？　そんなんいつ決めたん？」

「さっき。準備が出来次第行くから、ちゃっちゃと準備してな」

おいおい……。

いつも付き合わされている、こっちの身にもなって欲しいものである。

勝手に行け、と言いたいところだが、そういうわけにもいかない。

俺が〈風の守護者〉で、ねーちゃんがウインドマスターだからだ。

ガーディアンには、マスターを守る義務がある。

いや、別に義務に文句があるわけじゃない。どちらかと言えば、俺の適合者がねーちゃんだということに文句があった。

身内から適合者が出るなんて滅多にないらしくて、知り合いは皆、適合者を探しに行かなくていいから楽で羨ましい、と言っている。

だが、それは大間違い。

ここまで身勝手な姉がいると、逆にかなり辛い。

ガーディアンが弟だから、遠慮なんて全くしてくれない。

しかも、一度決めたことはてこでも動かない頑固っぷりだ。

結局、今回もこちらが折れて、旅行の準備をする羽目になった。

ウエンディは焦っていた。リチャードとの連絡が途絶えたからだ。
リチャードは決して弱くはない。その強さは折り紙付きだ。
だが、そのリチャードとの連絡がつかない内に、また昨日に爆発事件が起こった。
爆発が起きたのは隣町。恐らく今日にはこの町で『何か』が起きるのだろう。
これの意味することは、爆発事件はトレイターの仕業だということ。
そして、リチャードはそのトレイターに敗れたということだった。
「……信じられませんわ」
リチャードの携帯に電話して5回目の呼び出し音を鳴らしている中、ウエンディはそうつぶやいた。
リチャードが負けたとなると、予想していた状況とは大分異なったことになる。
一番心配なのが、トレイターの強さだった。
話を聞いた限りでは、弾とリチャードの強さは同等。
ジャックは年齢から考えて二人より弱いはずだ。
つまり、一対一では辛い戦闘になるのは簡単に予想できる。
能力の相性は当然あるのだが――あまりいい結果を得られる気はしなかった。
「お嬢様」
隣で、ウエンディが電話をかける様子を見ていたジャックが話しかけてきた。
「どうなさりますか？」
選択権は全て、ウエンディにあった。
逃げるのも、戦うのも自由だ。逃げて……逃げ切ればいいだろう。
しかし、もしトレイターに追われた場合。
果たしてどうなるだろうか。

時間があるなら、ガーディアンを集めて一対多数で戦うのもありだが……。
逃げている間に、恐らく爆発事件がまた起こるのだろう。
そうなれば、少なくとも一日に自分たちの責任で最低でも一人以上死ぬことになる。
時間はない。一般人を無視して逃げて時間を稼いでも、時間が経てば経つほど状況が悪くなる可能性もあるかもしれない。
ウエンディはそこまで考え、この町で応戦することに決めた。

「……ああ……ああ……判った。それじゃああの場所で」
電話を切り、弾は舌打ちをした。
「どうしたの？誰からの電話？」
「ウエンディからだ。あの爆発は、やっぱりトレイターがやっていたらしい。
多分今日襲ってくるから、例の場所で待ち構えることになった」
例の場所、とはあの私有地のことである。
まだ何にも使われていないし、多少派手にやっても人には気づかれにくいことから、
戦闘が起こると判っている場合は極力そこで戦うようにしていた。
「ねぇ、そのトレイターって……強いの？」
痛いところをついてくるな、と弾は思った。
そっちの方面には話を持って行きたくなかったのだ。
リチャードの強さを花梨は知らないとはいえ、リチャードがやられたことを知れば不安にさせるかもしれない。
それに正直、弾もかなり不安だった。
ウエンディの話ではジャックと弾の二人で戦うらしいが、弾は単独で戦うことに慣れすぎている。
ジャックの足を引っ張る可能性もあったし、もしトレイターがリチャードを軽々と倒したならば、
二人でも勝てるかどうか怪しい。

更に本音を言えば、花梨とウエンディを先に逃がした方がいいとも思っていた。
ガーディアンが死んでも替えなどすぐに見つけられるが、マスターが殺されて〈支配者の魂〉が奪われたらどうしようもないのだ。
だが、ウエンディはここで戦う道を選んだ。
となれば、逃げる道はなくなった。
多分、花梨に一人でも逃げろ、と言っても言うことを聞かないだろう。
だから、とりあえず曖昧に答えた。
「さあな、トレイターにもピンからキリまでいる。何とも言えない」
夜になった。今日はまだ爆発事件は起きていない。
私有地には影が二つ立っていた。
弾と、ジャックのものである。
花梨とウエンディは近くにだが隠れている。
敵が一人とは限らない以上、あまりに離れていると逆に危険だからだ。
弾は時折炎を出して、トレイターが『力』を感じて来るように誘導している。
ただ、恐らくやっては来るだろうが、どこからどんな風にやってくるか判らないうえに、
姿も判らないのだから一瞬たりとも気が抜けない。
もし気を抜けば、その一瞬で勝敗が決まるかもしれないのだ。
だから、弾が気を引き締めようとした時、そいつがやって来た。
真正面から。どうどうと。
外見はただの優しそうな西洋系の男だが、醸し出している雰囲気が外見とは全く違う。
殺気が弾達とは比べものにならないほど強い。
「こんな所に集まって、罠も仕掛けずに居場所を教えてくれるとは

……馬鹿か親切かのどちらかか？」
男は、弾達を見ながら言った。
その表情は、まるで肉食動物が餌を追いつめて楽しんでいるかのような表情だ。
見られたのが一般人だったなら、恐怖によって動けなくなっていたかもしれない。
「名前は？」
男が突然そう言った。
「今から死ぬ可哀想な奴らの名前くらいは聞いておいてやらないとな。
昨日の奴には名前を聞くのを忘れていたから、早いうちに聞いておくぞ……ああ、言い忘れていたが俺はダニエル・ペリル。
今から自分を殺す相手の名前くらいは知っておきたいだろう？」
癇に障る言い方だ。
もう自分が勝った気でいる。
黙らせるために、弾は斬りかかった。ジャックもワンテンポ遅れて後に続く。
弾の武器はいつもの刀。ジャックの武器は、レイピアという突きに特化した剣だ。
街灯の光を反射する刀身が二つ、ダニエルに踊るように襲いかかった。
ダニエルは懐から銃を一丁取り出し、しかし撃たずに弾の刀を軽くかわす。
そこにジャックが横から突きを放った。通常ならかわすことも難しい突き。
だが、ダニエルはその突きを銃で受け止めた。
それに対してジャックは、息をつく暇も与えないほどの速度で連続で突き続ける。
一発、二発、三発……。
その全てが事のごとくかわされるか防がれるかしていた。

ダニエルは攻撃をかわす動作の中で、ゆっくりと銃を暗闇の一角に向けた。
普通に見たら何もないはず場所。
だが、今はそこに花梨たちが隠れていた。
気配、とでも言うのだろうか。
ダニエルはそれをこの激しい攻撃の中で読み取り、攻撃対象にしたのだ。
花梨たちは、ただの銃なら絶対に当たることのない位置に隠れている。
しかし、もし『力』を使った攻撃ならば花梨たちは危険だ。
運試しは出来なかった。
だからジャックは、『力』を使った。
ダニエルの頭の中で響かせた言葉は、『後ろを見ろ』。
案の定、ダニエルは後ろを振り返った。
そこに、ジャックがレイピアで鋭い突きを放つ。
ダニエルはすぐに気がついて避けようとしたが、避けきれずに利き腕の右腕に刺さった。
続けて、弾が刀を振ろうとしたとき——爆発が起こった。
爆発したのはダニエルと弾の間の空間。
弾はフレイムガーディアンだから爆炎を防いで被害は爆風だけだったが、ジャックは爆炎と爆風に呑まれて吹き飛んだ。
弾もとっさだったので、ジャックの炎を防ぐ余裕が無かったのだ。
爆炎はかなりの熱量だったから、ジャックは多分もう戦えないだろう。
弾がそう判断しながら地面に着地したとき——目の前にはダニエルが立っていた。
刀を動かす動作よりも速く、ダニエルの鋭い蹴りが弾の腹部に突き刺さる。
「ぐっ……」
その衝撃で、弾は刀を手からこぼした。

そして直後、更に背中に強烈な打撃が襲いかかった。
怪我をしていない左腕で、思い切り殴りつけられたのだ。
身構える暇などあるはずも無く、弾の意識は急激に遠のいていった。

「ちっ……つまらねぇ」
弾が倒れた後、ダニエルは吐き捨てるようにそう言った。
「少し『力』使っただけでこんなもんかよ……！？」
突如、ダニエルの身体に力が入らなくなる。
「それは……毒……です」
全身に酷い火傷を負ったジャックが、ゆっくりと身体を起こしながら言った。
「ガーディアンやトレイターを毒で殺すのは難しいですが……しばらくの間身体を痺れさせること位は出来ます」
「毒とか……つまらねぇんだよ。自分の力で戦うから面白いってのに……」
普通にしてりゃマスターには手を出さないつもりでいたが……止めだ。
罰を与えることにしたよ……今から丁度一分後。俺の『力』全てを使って、俺の身体を爆発させる。
破壊力はこの町一つが吹き飛ぶくらいだ。どんなに頑張っても逃げ切れないし、俺を殺しても死体が爆発する。
例え細切れにしたって、絶対に爆発する。つまり、お前らは絶対に死ぬんだよ。
俺を怒らせたことを懺悔して、巻き込むこの町のみんなに大声で謝るがいいさ。おっと、後３７秒くらいかな？」
ダニエルがお喋りを終えると同時。
一筋の銀色が、ダニエルの首を刈り取った。
首は見事に放物線を描き――落ちた。
リチャードの足下に。

リチャードの姿を見るや否や、ウエンディは隠れていた場所から飛び出して叫んだ。
「い、今までどこに居たんですの！？」
その質問にはすぐには答えず、リチャードは恭しくウエンディとジャックに一礼をした。
「お嬢様と執事さんのお陰で、記憶を完全に取り戻すことが出来ました。
ただ、それと同時に私は償わなければならない事も思い出したのです。
だからお嬢様の最後の命令、『こいつを片づけろ』というのだけ果たして、俺は償いをします」
リチャードの言っている意味が判らず、ウエンディにつられて姿を現していた花梨が尋ねた。
「償いって……？」
「俺はね……最愛の人を……婚約者をマージしたんだよ……これ以上話す暇は無いな。
もう爆発してしまう……今から重力場を作るんで、身体が少しの間重くなる。苦しいと思うけど、耐えて。
……それじゃあ、今から行くよ。遅くなったけど約束は守るよ……スー」
言って、リチャードは重力場を作った。形はドーナッツ型で、リチャードとダニエルの死体の周りが急激に重くなる。
「きゃっ……」
重力場の範囲には意識を失っている弾や、花梨たちも含まれている。
リチャードは潰れそうなほどの重力で、自分以外を『固定』した。
「リチャード、命令です。止めなさい！」
ウエンディの声が響く。
だが、リチャードはそれに従わずに最終段階へと入った。
「これは俺にとって必要な事です。それに、どうせこのまま放っておいても、みんな死ぬんです。

やらせて下さい……お元気で」
その言葉と同時に、リチャードは自分の『力』を全て使い、ドーナッツ型の重力場の中心――自分とダニエルの死体がある場所に重力場を作った。
それは周りとは桁違いで、世間一般で言うブラックホールになった。
その後は一瞬だった。
ブラックホールはリチャードと死体を呑み込んで――消えた。
ブラックホールが消えたときに周りの重力場も無くなって、花梨たちは立ち上がる。
一分経っても、爆発は起こらなかった。
「ねえウエンディ……」
少しして、花梨はウエンディに話しかけた。
「なんですの？」
「マージって……何？」
花梨が尋ねた瞬間、ウエンディは一瞬詰まった。
真実を話すべきか、嘘を話すべきか悩んだのだ。結局、真実を話すことに決めたが。
「マージは、適合者だけが出来ることですわ。
マスターのマスターソウルを、ガーディアンの体内に移し替えること。
マージをすれば、マスターがいなくても『力』を使うことは出来ますわ。ただし――」
ただし、という言葉に、便利ね、と言おうとした花梨の口が止まった。
「――マージをされたマスターは……死にますわ。
……もう帰らせて頂きますわ。弾様もそろそろお目覚めになるでしょうし。
主人の命令に従わない従者が一人減りましたから……あの大馬鹿者」
花梨は、ウエンディが最後につぶやいた言葉を聞き逃さなかったが、ウエンディの頬を流れる一筋の滴には気がつかなかった。

「智津子ー、どこら辺なん？」
紗英が尋ねるも、智津子は小さく唸る。
「さっき、確かにここら辺でかなり強い『力』を感じたんだけど……
……二手に分かれましょ、紗英はマスターだから隼人と一緒に行動して。
私は一人で探すわ」

第三話：第四章：償い（後書き）

今回は更新がかなり遅れて申し訳ありませんでした。
今度からこまめに更新出来るように、
短めに章を区切ろうかと思っています。

第三話：エピローグ：姉弟

弾の意識が戻った後、花梨と弾は二人並んで夜道を歩いていた。
最初は二人とも黙っていたが、しばらくして不意に花梨が声をかけた。
「ねえ……弾」
「なんだ？」
花梨は途惑う。
尋ねていいことなのだろうか、と。
だが、弾が今まで教えてくれなかった理由の方が気になった。
「マージの事……なんで教えてくれなかったの？」
弾が歩みを止めた。つられて花梨も止まる。
「誰が教えた……？」
「質問に答えて！」
弾は、苦虫を噛み潰したような顔をした。
「花梨には……関係のない事だったからだ」
花梨は嘘だとすぐに気づいた。
ウエンディの説明だと、マージはマスターと密接な関わりを持っている。
しかも、弾は一度も目を合わそうとはしなかった。
そのことに腹を立て、花梨は思わず叫んだ。
「嘘よ！ウエンディに細かいことを聞いたわ。どうして……どうして言ってくれなかったの！？」
「関係ないんだ！俺は……絶対にマージなんかしないから。惚れた奴を殺すなんて……俺には出来ない」
数秒、沈黙が流れた。
それが遠回しな告白だと花梨が気がついたとき、既に弾は顔が真っ赤になっていた。
「ま……またまたー、こんなタイミングで冗談なんか止めてよー」

いや、恐らく本気なのだろう。しかし、素直に受け止めたくない自分がどこかにいた。
嬉しいのだが——この関係が壊れてしまう気がして。
「……じゃない」
弾が何かを言ったが、うまく聞き取れなかった。
「え？何？」
「冗談なんかじゃない！」
「きゃっ！？」
急に弾が花梨を押し倒した。
今いる場所は、帰る途中だったので住宅街のど真ん中。夜とはいえ、いつ人が来てもおかしくない場所だ。
どうせ右腕を押さえられていて、逃げることなど出来ないのだ。覚悟は出来ている。
「証拠……見せてやるよ」
ゆっくりと、弾の顔が花梨に近づいていく。
（やばい、きれちゃってるよ……されちゃうのかなぁ……）
希望を言えば、もうちょっとムードがある方がよかったのだが……。（こんな場所で、しかもこんな状態でファーストキッスなんて嫌だけど……弾ならいっか）
そう思って、花梨は目を閉じた。
直後。
「死ねっ！」
という場違いな声と共に、弾の身体は吹っ飛んだ。

紗英と隼人は、涙の跡を残したウエンディと全身に火傷を負っているジャックとホテルでバッタリ会った。
幸い、今フロントの近くにいる人は紗英と隼人を除いて、誰もジャックの火傷に気がついていない。
騒ぎになる前に、四人は静かに同じ部屋へと入った。
隼人が部屋の鍵を閉めると、紗英が静かに伝言を伝える。

「ウエンディ、ジャックさん。校長からの伝言です。『戻ってこい』と」
隼人は、そんな紗英を見ながら欠伸をしていた。
（なんで真面目な話の時にだけ、標準語で話すなんて器用な真似が出来んねん……）
というつっこみを心の中でしながら。
「そう……判りましたわ。明日、ここを立ちましょう。あ、家を一つ買ったのですけど……自由に使って構いませんわよ。場所は弾様に聞いて下さいな。今日は家に帰る気になれなかったから、ホテルに来ただけですの」

弾は受け身もとれずに、地面に激突した。
何が起こったのか判らず唖然とする花梨に、一本の手が差し出された。
綺麗な手。訳も判らずにその手を握ると、ゆっくりと引き起こされた。
「大丈夫？怪我はない？」
花梨のことを気遣う声。柔らかい感じがして、明らかに女の人のものだと判る。
「あ……はい」
「良かった……弾！」
突然、声色が変わった。
その女性は弾が起きあがったのを確認すると、大股で弾の元へと歩いていく。
一目で怒っていると判る歩き方だ。
女性は弾の目の前で止まり、弾を睨みつけながら口を開いた。
「あんた……今何してた？え？その子に襲いかかってたわよね？私は女に優しくしない男はクズだって言ってたわよね、昔から。それなのに……レイプしようとするなんて……それでも私の弟！？ダメね……生きる価値無しだわ……死になさい、今すぐ。ていうか

私が殺すわ」
口を挟む隙すら与えないマシンガントーク。
弾に姉がいたこと自体が花梨にとっては驚きだったが、彼女が弾を本気で殺そうとしていることの方が驚いた。
目が据わっているのだ。しかも、殺意という名の禍々しいオーラを身体中から大量に放出している。
とりあえず、自分がここで弾を庇わないと弾が酷い目に遭うのは目に見えている。
大体、レイプなんて酷いものではなかったし、場所は嫌だったけど弾にされること自体は嫌ではなかった。
だから花梨は、弾の姉に声をかけた。
「あの……別にレイプでもなんでもないから、あまり弾に酷いことしないで貰えませんか？
弾がいないと、私困るし……」
効果はあったようで、弾の姉から出ていたものが消えてなくなり、弾の姉は花梨の方を見た。
「そうなの……？もしかして、そういうプレイが趣味？止めた方がいいと思うけど……って——あなた、マスターだったりする？」
花梨は無言で頷いた。
「こんな可愛い子が……よし、用事終わったらすぐに帰るつもりだったけど、しばらく弾と一緒に暮らすわ。
この馬鹿がもう間違いを起こさないって判った時に帰る。うん、決定」

「何かあったんやろか？ウエンディがあんな素直なんて珍しい……
明日は雪でも降るんちゃうか？」
「ジャックさんが火傷負ってたし、もしかしたらさっきの『力』と関係あるのかもね……あーあ、せっかくの秘策が無駄になったわー」
言って、紗英は懐から紙を一枚取り出した。どうやら手紙のようだ。
「なんなんそれ？ちょっと見せてーな」

隼人は無言で渡された手紙に目をとめた。
内容は――私はずっと前からあなたのことが好きでした（中略）なので、こんな危険な場所からは早く離れて下さい。といったもの。ここまではいい。告白をして、遠回しに早く帰れと言っている。だが、最後が問題だった。
ＢＹ　隼人
そう書いてある。
隼人はこんなもの、書いた覚えはなかった。
「ウエンディの惚れっぽい性格を利用しようと思ってん。うまくいけば、それで弾のことを気にしなくなるし」
隼人が文句を言う前に、紗英はそう告げる。
「下手すりゃ、今度は俺がターゲットやんか！？そうなったらどうするつもりやってん？」
「あんた一人の犠牲でみんなが幸せになるねんで？諦め」
「お――」
ピリリリ・・・・・・
隼人の発言を遮る形で、紗英の携帯電話が鳴った。
面倒くさい、というだけの理由で、着信音は昔からシンプルなこれだ。
「はい、どうしたん？……うん……うん……あ、そう。判ったわ。こっちも、ウエンディの説得に成功したで。
明日帰るって……え？いや、止めた方がええんとちゃう？あの感じやと、見送りなんてない方がええって。
……そう、弾とかにも後で伝えたらええやん。……ホンマに？それじゃあ私も残ろうかな……うん、そりゃ隼人も強制やろ。
……いや、ウエンディが買った家をくれるって。……うん……うん、それじゃあ」
ピッという電子音を鳴らして電話が終わる。
「隼人、あたしらもこの町に残ることにしたし。ただし、弾の適合者にはまだしばらく会わないことになったから」

「は？ いい加減にせえ、このわかづくぶっ！？」
「五月蝿い、今度文句言ったら今のよりきついのかますで？」
隼人は裏拳をくらった顔をさすりながら立ち上がり、何も言わずに紗英の後ろについて行った。

外伝：とある一日（前書き）

これは本編とはあまり関わりがありません。
こんな一日があった、というだけのことです。
ノンシェイパーやトレイターとの戦い以外の日常の戦い（？）ですので、のんびりと読んで頂ければ幸いです。

外伝：とある一日

「ふあ……」
朝。花梨は心地よい眠りから覚めて、大きな欠伸をした。
今日は日曜日。宿題は昨日のうちに全てやったので、今日はのんびりしていられる。
弾のお姉さん――智津子さんの話では、ウエンディは連続爆発事件が収まった翌日に帰ってしまったらしい。
いたらいたで鬱陶しいんだけど、やはりいないと寂しいものである。お別れくらいは言いたかった、というのが本音だ。
そうそう、弾はあの日のことを後でちゃんと謝ってくれた。
本人曰く、あの時はまともな思考じゃなかったらしい。
言った直後に、そんなの言い訳になるか、と智津子さんのドロップキックが弾の後頭部に見事に決まったのはまあ余談。
のんびりと時計を見る。7時ピッタリ、いつも通りの時間。
癖になったみたいで、目覚まし時計の有無に関わらず毎日、この時間帯に起きている。
ベッドから起き上がろうとしたとき、床が軽く揺れた。
地震ではない。智津子さんが、弾を叩き起こしたのだ。
振動は下の階から伝わって来ている。
智津子さんが弾を部屋から追い出してその部屋を占領したために、弾は仕方なく毎日一階のリビングで寝ている。
そして、もし7時を一秒でも過ぎて弾が眠っていたら、智津子さんが叩き起こす。
だが最近、あれは『叩き』起こしているに入るのか気になっている。
この前一度見たのは、寝ている弾のみぞおちにかかと落としを綺麗に決めている瞬間だった。
当然弾は目覚めた――が、痛みでしばらく身体を起きあがらすことは出来ないようだった。

『叩く』というレベルではない。『蹴る』だとか、『殴る』の領域だ。
やはり痛いのはいやなのだろう。弾は最近徐々にだが早起きをするようになっている。
そのお陰で、最近弾を起こす必要はなくなっていた。
（ご飯作らなきゃ……）
前に一度、智津子さんがご飯を作ったことがあった。
こう言ってはあれだが……不味かった。食べ物？と思わず疑いたくなるほどに。
使っている食材は普通のものなのに、どういう調理をしてああなったのか……未だに謎だ。
とりあえずそれ以来、智津子さんがご飯を作ろうと考える前に作っている。
失礼だけれど、あれはもう食べたくなかった。
キッチンに立って、さぁ作ろうと思ったとき、チャイムが鳴った。
それと同時に聞こえてくるのは
「花梨ー、助けてー」
という情けない声。この声は舞のものだ。
ドアを開けると、舞だけではなく司までがいる。
このパターンで考えられるのは——
「悪いな、突然昨日の夜に伯父がやって来たから……昨日は出られなかったから、さっきみんなに気づかれる前に出てきた」
やっぱり。
一度でいいから、この二人にここまで嫌われているその伯父さんを見てみたいものである。
「あれ……靴が多いね。誰か来てるの？」
舞が、玄関に置いてある女物の靴を見て言った。
舞の観察力には驚かされる。一目で花梨の靴ではないと見破ったのだ。つまりは、花梨の持っている靴があらかた判っているということ。

「うん、智津子さん――あ、弾のお姉さんね。が、ちょっと前から来てるの」
「へえ、弾に姉なんていたのか……ま、いいや。とりあえず、伯父が帰るまでこの家にいさせてくれ」
言って、司が入ってきた。舞も後に続く。
三人がリビングに入ると、そこでは智津子さんが死にかけの弾の上に座っていた。
「お客さん？ごめんね、花梨ちゃん。この馬鹿がこんな格好で」
下敷きになっている弾を指差し、笑いながら智津子さんは言った。
「いえ、別にそれはいいんですけど……弾、痙攣してるけど平気ですか？」
「死にはしないから平気平気。さて、ちょっと出かけてくるね」
智津子さんは弾が起きない場合、弾でストレス解消をして、どこかへ出かける。
行き場所は大抵パチンコか競馬場。不思議なことに、行った日は9割方勝ってお土産を持って帰ってくる。
弾に理由を聞いたら、「詐欺に近いしがっかりするから聞くな」と言われたので更に不思議だった。

弾が起きあがったのは、智津子さんが出て行って五分ほど経った頃だった。
突然だったので、弾の存在すら忘れて大富豪をしていた手が止まる。
弾は何も言わずに冷蔵庫を開けて、中にあったボテジュースというのを勝手に飲み始めた。
ボテジュースは癖があるのだが、慣れるとなかなかおいしい。
最近好きなジュースの一つで、しかもあれは最後の一本だったはずだ。
「あ、それ私のだったのに……弾、新しいの買って来てよ」
単純なお願い。そのはずだったのだが、なぜか司が反応した。
「暇だしさ、パシリは大富豪で決めないか？」

「あ、いいねー。じゃあ弾も加わってよ、当然花梨も」
……はい？
まずいことになった。
実は、そのボテジュースが売っている店は近くにはない。一番近くて、５ｋｍほど離れた所にあるコンビニだ。
往復で１０ｋｍ。自転車があるとはいえ、正直面倒くさい距離。しかも、坂を登ったり降りたりしなければならない。
もし大富豪で負けたら、その道のりを自転車で移動しなければならない。
そんな悲しい現実と直面しながら、しかし拒絶の言葉が口から出ないうちに、司がドンドンとカードを配っていく。
そして配られた１３枚のカードを見て——唖然とした。
あり得ないほど弱いのだ。
ジョーカーは一枚あるが、それだけでは補えきれないほどに弱い。
３が二枚、４が一枚、５が一枚、６が三枚、７が一枚、１０が一枚、１１が二枚、１２が一枚、そしてジョーカーが一枚。
これで勝てるわけが——いや……まだ希望はあった。
もし一度でもこっちからのスタートになれば、６とジョーカーで革命が出来る。
３が二枚あるのだ、これなら勝てるかもしれない。
大富豪は順調に進んでいった。
どうせ革命をするのだ、数字の大きいカードは躊躇せずに使う。
そして、まず舞があがった。
2や1をかなり持っていたので、当然といえば当然だった。嬉しいことに、順番は舞の次だ。
思わず笑みがこぼれた。
舞があがれば、一旦カードが流れて好きなカードを出せる。
残っているのは3が二枚、４が一枚、５が一枚、６が三枚、ジョーカーが一枚、だ。
勝てる。確信めいたものが胸を過ぎる。

６を三枚と、ジョーカーを一枚出しながら、高らかに宣言した。
「革命！」
「あ、革命返し」
あっさり言ってのけたのは弾。

当然、負けた。

なんだか不公平だ。
コンビニで目当てのものを買いながら思った。
大体、あの状況で革命出来るカードを残しておく神経が理解出来ない。
ブツブツと心の中で文句を言いながらコンビニを出ると――自転車が無かった。盗まれたのだ。
中にいたのは十五分、少し漫画を立ち読みしていたのだけど、元々すぐに帰るつもりだったので自転車に鍵はつけていなかった。
自転車がないと、徒歩で帰らなければならなくなる。
バスや電車は少し遠いし、タクシーに乗るとお金が勿体ないからだ。
溜息をつきながら、仕方なく歩き出す。
足取りは重かった。

ひたすら歩いて、ようやく家についた。
ダイエットだと思えば平気なのだろうが、嫌なことが続いていたためにポジティブに考えることが出来ない。
家に足を踏み入れたとき、良い匂いが鼻をくすぐった。
食べ物の匂い。
そういえば、朝ご飯を食べずに外に出たのだった。思い出すと、急にお腹が空いてくる。
リビングへと入ると――机の上にはトーストとジャム、コーヒーといったシンプルな食事が四人分並んでいて、
そのうちの三つの前には弾と舞と司が座っていた。

「あ、花梨お帰りー。待ってたんだよ？早く食べよっ」
ニコニコ笑う舞。
それを見て、思わずこちらも笑みがこぼれる。
空いている食事の前に座って、ジャムをトーストに塗った。

夜になった。
定期的に司と舞は家に電話をしていたが、まだ伯父さんはいるようだ。
智津子さんも帰ってきた。見知らぬ女性と共に。
紗英さんといって、智津子さんの親友らしい。
大阪の人みたいで、初めて聞いた関西弁に少し焦った。
二人の両手には、恐らく競馬で勝ったお金で買ったお酒とおつまみが大量に抱えられていた。
「さぁ、宴会よー」
と帰って来るなり智津子さんが言って、なぜか全員強制参加の宴会が始まり、未成年にも関わらずチューハイなどをみんなが飲んだ。
紗英さんはいつの間にか帰っていて、智津子さん以外のメンバーは全員深夜１２時にはダウン。
司と舞は結局泊まって、翌日の学校は弾以外が頭痛で休んだ。
ちなみに自転車は後日、最寄りの駅で放置されているのが発見された。

外伝：とある一日（後書き）

最後の方が少しグダグダになってしまいました、申し訳ありません。
次話からはまた本編ですので、嫌いにならずに読んで欲しいと思っています。

第四話：プロローグ：蟲

朝、秋野高校にある小さな弓道場で音が響いていた。
音の種類は三種類。
矢が風を切る音。矢が的に当たる音。そして、話をしている声。
だが、不可解なことに弓道場の中には一人しかいなかった。
彼の名前は霧谷哲也。優秀な生徒で成績は上の中、弓道部内では一番うまいはずだが、なぜか大会に出たことがない。
顔やスタイルは抜群で、女子生徒にかなり人気がある。
帰国子女ということで、夏休み明けから学校に転校してきたのももしかしたら関係しているかもしれない。
その分、他の男子からは妬まれてあまり好かれていないが、霧谷本人は元々孤立していたのであまり気にしていない。
性格自体は穏和なのに、どこか近寄りがたい雰囲気を醸し出しているのだ。
そんな不思議なところが、更に女子生徒の興味をそそっているのも事実である。
「ダニエルは勝手に暴れすぎたね……戦いたいだけの男が世間を騒がせて、『彼』の命令を全く無視していた。
あっちがブラックホールを作らなければ、ターゲットが死んでいたかもしれないというのに」
穏やかな声が弓道場に響く。
一見聞いている者はいないようだが、どこからともなく返事が返ってきた。
能天気な少年の声で。
「まあどうでもいいんじゃないー？それより、近いうちにそっちの地域でお待ちかねの『あれ』が起こるみたいだから、
そろそろターゲットに接近する準備しておいてよー。僕もそろそろアルフレッドさんとそっち行くからさー」

（そろそろ……か）
霧谷は近くを飛び回る蝿を見ながら笑った。
（もうすぐ世界が終わる。腐りきった世界が……）
思いながら、弓を射る。
ヒュッ――と風を切る音が一瞬して、これの前に放った矢に刺さり、矢が割れた。
割れた矢は真っ二つになり、もう二度と使うことなど叶わない。
この世界では、やり直しの利かないことがほとんどだ。
一度やってしまうと、ＣＤやＤＶＤのように巻き戻しすることが出来ないのだ。
あの矢のように……。
「うわー、射込んじゃったんですか、しかも的心で……矢、勿体ないけど凄いですね。二回連続で的心って」
いつの間にか、一人の女子生徒が弓道場に入ってきていた。
（あれは確か……斉藤舞？）
あまり話したことのない生徒で、一年生の弓道部員。
下手くそだが、練習にはよく来ている。上達する気配はあまりないが。
通常、この弓道部には朝練はない。
なのにどうしてこんな所にいるのだろうか。
（いや、それはどうでもいい。確か彼女はターゲットと親密な仲のはず……）
「斉藤舞ちゃん……だよね？」
突然名前を呼ばれて、舞はドキッとした。
そりゃそうだ。憧れの先輩が、かなり部員数の多いクラブの中で自分の名前を知っていたのだから。
ちなみに、部員数が多い理由は霧谷目当ての女子が多いから。
弓道部も男女で分かれているとはいえ、練習する場所は一緒なのだ。
「どどど、どうして私の名前を……？」
驚きと恥ずかしさで呂律が回っていない舞を見て、霧谷は嫌みのな

い微笑みを浮かべた。
「そりゃ、好きな子の名前くらいはチェックしてるよ。もしよければ、付き合ってくれないかな？　返事は急がないから。良い返事を期待してるよ」
「へ？　あ……ってえええええええ！？」
舞が声をあげたとき、既に霧谷は弓道場から出ていた。
蝿はのんびりと空を泳いでいた。

第四話：第一章：助言（前書き）

いつもと比べてかなり短いです。

一章を短めにするとは言ったけど、これはまずいかも……。

第四話：第一章：助言

「花梨ー、どうしよぶっ！？」
走ってきた舞は、司の足払いをまともに受けて盛大に転んだ。
「どうしたの？舞、そんなに慌てて」
いつものことなので、花梨は気にしない。
足払いをかけた張本人は、欠伸までしている。
だが、舞はなぜか怒らなかった。
余程大変なことが起きたのだろうか。
ここにきてやっと舞のことを心配しだした花梨に、舞が言ったのは一言。
「私、告白されちゃった……」
自分自身でも信じられないのだろう。やたらと瞬きばかりを繰り返している。
「うっそ？誰？」
「霧谷先輩……」
花梨は驚いた。
実は前に舞から、霧谷先輩のことが気になっている、という相談を受けていたのだ。
そのときは、告白したら？と言っていたのだが……。
まさか両思いだったとは。
「良かったじゃない、それでＯＫしたんでしょ？」
「いや、まだなんだけど……どうしよう？どうすればいいと思う？」
はあ、と花梨は思わず溜息をつく。
自分も気になっていたなら、普通は即ＯＫだろうに。
大体、舞はこの手のことに臆病すぎるのだ。
そのせいか顔やスタイルはいいのに、彼氏を作ったこともない。
「舞も気になってるんでしょ？さっさとＯＫしちゃいなさいよ。善は急げってね。ね、司もそう思うでしょ？」

「さあな……」
司は渋った返事をした。
「決めるのは舞本人だ。だけど、敢えて助言するなら……止めとけ。泣きたくないならな」
意味ありげな助言。
だが、二人はその意味がよく判らなかった。
「どういうこと？　霧谷先輩のこと、何か知ってるの？」
「いや、全然知らねえよ。……まあ好きにしとけ」
言って、司は自分の席についた。もうそれ以上、何も話そうとはしなかった。

第四話：第二章：返事

キーンコーンカーンコーン・・・・・・
大きな音のチャイムが、４限目の終了を告げた。
「起立、礼」
『ありがとうございましたー』
礼が終わると、授業で判らなかったところを教師の所へ尋ねに行く生徒や、早速お弁当を食べ始める生徒がほとんどだ。
いつもは花梨たちも、お弁当を取り出して食べる時間。
だが、今日は違った。
礼が終わるや否や、花梨と舞は二人で教室を飛び出したのだ。
向かう先は弓道場。
舞が行く理由は、勿論朝の返事をするため。花梨が行く理由は、舞の付き添い。
司は今頃、弾と二人で昼食でも食べているのだろう。
弓道場につくと、そこには誰もいなかった。
どうやら早く来すぎたようだ。
噂では、霧谷は放課後以外にも朝練と昼練を毎日欠かさずにしているらしい。
「舞、どうする？また後で来る？」
花梨の提案に、舞は首を横に振る。
「もうちょっとだけ……心臓がバクバク言ってて破裂しちゃいそうだから、早く終わらせちゃいたいの」
「返事を、かな？」
「ひゃっ!?」
いつの間にか、霧谷は二人の後ろに立っていた。
ニッコリと微笑んでいる。
そういえば、霧谷が怒っている顔は見たことがない。
いつも笑っているか、無表情かのどちらかだ。

もしここで舞が断ったら、どんな表情をするのだろうか。
あり得ない展開だけど、興味深いことには違いない。
「せ、先輩……いつの間に……」
「今来たところだよ。舞ちゃんは返事をしに来てくれたの？そこの君は舞ちゃんの付き添い？」
まるで全てお見通し、といった感じの発言だが、花梨は大したことでもないように首を縦に振った。
霧谷が言ったことは全て、ちょっと考えればすぐに判ることだし、不思議なことは弾と出会ってから、飽き飽きするほど大量に体験していたために慣れているからだ。
舞が意を決して、口を開いた。
「あの、先輩……今朝のことですけど……よろしくお願いします！」

「結局舞はＯＫするんだ。助言は助言。決定権は舞にあったし、俺の一言くらいで未来が変わるわけがないのに……ったく」
レンジで温めるだけのお弁当のおかずを口に頬張りながら、司はつぶやいた。
かなり小さい声だったのだが、弾には少し聞こえたらしい。
「ん？何か言ったか？」
さすがに内容までは聞かれていないようだ。
聞かれたところで何が変わる、というわけでもないのだが。
「何でもない。気にしないでくれ」

第四話：第二章：返事（後書き）

文字数はこれでいいんでしょうか。
もしよろしければ、ご意見を送って頂けると幸いです。

第四話：第三章：談話（前書き）

また更新が遅れて申し訳ありません。
リアルがちょっと忙しくて……って言い訳になりませんね。
見放さずに読んで頂けると幸いです。

時計の短針は5、長針は2の部分を指しているが、空はまだあまり暗くない時間帯。元ウエンディ宅に、二組の姉弟が集まっていた。
智津子と弾、紗英と隼人である。
「さて……ここに集まった理由は判ってるわよね？　弾」
「全然判ってない」
仕切っているのは智津子。
弾の即答を食らって、今は頭を押さえている。
「帰宅途中に突然、しかも無理矢理引っ張ってこられたんだ。判るわけねえだろ」
「修行が足りないねー、智津子の考えてることなんて顔見たら即判りやないの」
笑いながら言ったのは紗英。
「判る姉貴がおかしいんうおっ！？」
隼人は紗英が懐から取り出した吹き矢を紙一重でかわした。
矢は隼人の脇の下を通って、トッという音と共に壁に突き刺さる。
「あ、外した……下手になったもんやなあ。せっかく毒まで塗っておいたのに」
「いきなり吹き矢使うなドアホ！　しかも毒ってなんやねん！」
「トリカブト。人間なら死ぬけど、〈守護者(ガーディアン)〉なら辛うじて死なない量にしてるから刺さっても平気やって。
まあしばらく苦しかったり痙攣したりとかいろいろ大変やけど、後遺症も残らへんし」
全く悪気もなしに言う紗英。
ちなみに、恐らく紗英が言っていることは本当だ。
昔、紗英は大嫌いだった一人の男のガーディアンに、実験と称していろいろやっていた。
弾や智津子は、その哀れな男が真っ青な顔をしてトイレに駆け込ん

でいったり、口から泡を吐いて倒れていたりするシーンを幾度となく見たことがある。
結局死にはしなかったが、死にかけた回数は優に十回は超していただろう。
そのせいか一部の教師と生徒を除いて、紗英に自分から近づこうとする者はあまりいない。
「……で、何の話なんだ？」
弾はそんな二人を無視して話を進めた。
「私の勘だと、そろそろ厄介なことが起きそうなのよ。だからさ……花梨ちゃんに全部話したら？」
「——知ってたのか？」
「あんたが何かを隠してるってことだけ、ね。その内容は知らないわ。まあ勘なんだけど」
はあ、と弾は深い溜息をついた。
智津子は〈感覚の守護者(センスガーディアン)〉だ。
〈適合者〉は既に見つけているので、しょっちゅう『力』を使っている。
いや、使っているという表現は正しくはない。智津子の『力』は、基本的にオートで使われているのだ。
オートで使われている力は第六感、つまり直感の強化。
智津子が望まなくても、智津子の勘は大抵当たるというものだ。
お陰でギャンブルをしたらほとんど勝つ。一種のイカサマである。
しかも、オートの『力』は珍しい。
オートなので他のガーディアンはその『力』を感じることは出来ないし、自分の集中力などを全く要しないのだ。
ジャックの『心を読む』というのもこれにあたるが、これは知りたくないことを知ってしまうことがあるので、辛いことがあるらしい。
その点、智津子はこの『力』で辛いことは全くなし。
今回のように、相手が何かを隠している、というのすら直感で判るのだ。

「ったく……その『力』は反則だろ」
「今になって言うことじゃないでしょ。……で、何を隠してるの？」
好奇の目で問いかける智津子。その横ではまだ口論が続いている。
「大体な！最初に、俺らはしばらく弾のマスターに会わないって言ってたのに、なんで姉貴は会って、しかも宴会までぐおっ！？」
「男が過ぎたことをブツブツ言わんとき。そんなんやし彼女できひんねんで？」
弾はそんな口喧嘩をしている二人を横目で見つつ、再度深い溜息をつく。
そして口を開き、これまでのことを少しづつ話し出した。

「舞ちゃん、ちょっとこっち来て」
部活の最中に、舞は突然名前を呼ばれた。誰だろう、とは思わない。声で判る。
「あ、はい」
言って、舞は呼ばれた方に振り返る。
案の定、そこには霧谷が立っていた。
「霧谷先輩、どうしたんですか？」
小走りで近づいてくる舞に、霧谷はクスッと笑う。
「もう付き合ってるんだから、そんな他人行儀にしないでよ。好きに呼んで貰っていいけど、出来れば哲也って呼んで欲しいな」
笑顔で言われて、舞は顔を赤くした。誰にも言っていないが、舞は霧谷の笑顔が一番好きなのだ。
「えと……それはちょっと恥ずかしいから、哲也先輩じゃダメですか？」
「じゃあそれでいいよ。あとさ、早速だけど今週の土曜……というより明日なんだけど、もし予定が無ければデートしない？」
予定……あったかな？と舞は記憶を掘り起こす。
古文の宿題はあったけど、それは明後日にやればいい。
塾や家庭教師もないし、友達と遊ぶ約束もしていないはず。

「いいですよ。予定も無かったと思いますし」
「それじゃあ、明日の午前11時。この学校の校門前集合で大丈夫？」
「はい」
笑顔で答える舞に、霧谷も微笑みかける。
「それじゃあ、そろそろ練習に戻ろうか」
「あ、はい」
（……先輩とデートかぁ……明日が楽しみだな）

部活が終わり、一人で帰路についていた霧谷に一匹の蝿が近づいてくる。
「なんだい？」
表情を変えずに、霧谷はポツリとつぶやいた。
「いやー、そっちはうまくいってるのかなーと思ってさー。見てたんだけど、なんだか無駄なことしてない？」
蝿から声が返ってくる。だが、蝿が喋っているわけではない。
蝿を通しての会話。
この蝿は『力』を込めて改造したただの蝿で、いわば通信具のような役割を果たしている。
改造したのは霧谷ではない。
霧谷の『力』はこれとは全く関係のないもので、改造をしたのは今話している相手。
通信具と違うのは、『力』を相手に与えることが出来なくて、会話を心の中では出来ないこと。
発信器つきのトランシーバーや携帯に近い、とでも言えば想像しやすいかもしれない。
「無駄じゃないよ。今の俺は、ターゲットの親友の彼氏って立場。遠いけど、ターゲットを呼び出すこと自体は簡単に出来るはずだよ」
「そー？それじゃーいいけどさー。あ、判ってると思うけどー、僕たちは今かなり近くにいるからねー。後はあの自然現象待ち、だねー」
気楽な声。しかし、この声の持ち主が味方ながらも実は一番厄介だ。まだ幼いからだろうが、キレると何をし出すか判らない。
ただしキレていない時の考え方は面白くて、『力』でどんなことが出来るのかいろいろと実験しているらしい。
今回の戦闘で、実験の成果を見せてやる、と意気込んでいた。

「それじゃー、もう大した用事はないから通信切るねー」
一方的にそう告げて、蝿は空高く飛んでいった。

鋭い蹴りが弾の顔面に当たった。
弾が話し終えた瞬間に、智津子がやったのだ。
「どうしようもない馬鹿ね……そんな重大なことを花梨ちゃんに話してないなんて」
「あいつには、知る必要がないことは教えていないだけだ……」
パンッ。
平手打ちが弾の右頬に当たる。
「ほんっとに馬鹿。知る必要がない？何言ってるの？知る必要ありまくりじゃない。
ただのマスターと〈特異なマスター（ピキュリアー）〉だと、今後のことにいろいろ差が出ることくらい判ってるでしょ？」
どうやら智津子は本気で怒っているらしく、その雰囲気に気圧されてか隼人と紗英まで黙っている。
「……知らない方がいいんだよ」
吐き捨てるように言った弾に、智津子は間髪入れず言い返す。
「黙りなさい。今日中にとりあえず弾が隠してることを全部、花梨ちゃんに言いなさい。じゃないと、私が全部言うわ」
「チッ……判ったよ」
右頬をさすりながら、弾は諦めたようにそう言った。

「……？」
花梨は怪訝な顔をした。
リビングに入った時に真っ先に視界に入ったのが、正座をしている弾とその横で怒ったような表情を浮かべている智津子だったからである。
「花梨ちゃん、この馬鹿が話があるってさ。ちょっと聞いてやってくれない？」
「別にいいですけど……今日の晩ご飯、どうしましょう？時間がかかるのだと、そろそろ作り始めないと」
「後で出前とっとくわ。とりあえず、今は話聞いてやって」
押しの強い智津子に花梨は従って、とりあえず弾の正面に座る。
「話って？」
聞いた花梨に弾は一瞬戸惑い、しかし諦めたように口を開く。
「花梨は……ただのマスターじゃない。ピキュリアーだ」
「ピキュリアー……？どっかで聞いたことあるような言葉ね。で、それが何？マスターと何か違うの？」
「ああ、違う。ピキュリアーは、自分自身の『力』を制御出来るマスターのことだ」
花梨は思わず固まった。
数秒経って、三回ほど深呼吸をする。
「『力』って、私も炎を操れるってこと？」
「そうよ。しかも自分自身の『力』なわけだから、ガーディアンが扱うのよりもずっとうまく操れるわ」
智津子が頷きながら補足をする。
「なんで……また隠してたの？」
花梨は弾の方へ身を乗り出しながら、そう言った。
「〈吸収(マージ)〉のことも教えてくれなかったわよね？……私、そんなに

信頼ないかな？
私に関係ないとしても、先に教えてくれてたっていいでしょ？」
「っ……それは……」
「もういいわよ！」
花梨は叫んで立ち上がった。
肩を震わせていて、目には涙を浮かべている。
弾は、そんな花梨と決して目を合わせようとはしなかった。
話し出したときからずっと下を向いている。
智津子は何も言わずに、ジッと花梨を見つめていた。
全員が黙ってからほんの少し間が空いて、花梨は家の外へと飛び出した。
まだ暗くはなりきっていない空が花梨を照らす。
今日は舞と司の家に泊めて貰おう。
そう思って走り出してすぐに、花梨は誰かとぶつかった。
「ご、ごめんなさい……」
「やっほー、花梨ちゃん」
返ってきたのは軽い言葉。
顔を上げれば、そこには紗英がいる。
「どうしたん？やっぱり弾が黙ってたことに腹が立ったん？」
「知って……たんですか？」
不安そうな顔をする花梨に、紗英はゆっくりと首を振った。
「でも、さっき聞いたばっかりやしね。で、腹が立って飛び出してきたん？」
「まあ……でもダメですね、私。きっと弾にも何か考えがあってやったことなのに、その場の感情だけで動くなんて……」
「んー……あ、そや。それじゃあ、今度はこっちが弾に黙って何かしいひん？
例えば……『力』の使い方を覚える、とか。勿論弾には秘密でな」
そう言いながら、紗英は面白そうに笑った。
いきなり弾の目の前で『力』を使う。

花梨は、面白そうだな、と思った。
けれど、どうせならしばらく無愛想にしてやろうか、とも思う。
黙っていた罰だ。
「面白そうですね。紗英さん、『力』の使い方、教えて下さい！」
言って、頭を下げた花梨に、紗英は少し言いにくそうに返事をする。
「そのなー……私はマスターやから、『力』は使えへんねん。あ、でも弟がガーディアンやから、弟に教えさせるし。
今日はもう遅いし、『力』の使い方は明日から練習しよ？場所は私の家。あ、昔ウエンディが住んでたとこな。
いらないって言ったから貰ってん」
紗英さんはマスターだったんだ。紗英さんの弟は優しいのかな。帰ったら弾になんて言おうかな。そんな近くに住んでたんだ。
などという考えが頭を過ぎるが、花梨は敢えて「はい」とだけ答えて家に帰っていった。

第四話：第六章：デート（前書き）

最近どんどん書くペースが……。
それでも読んで下さっている皆様、本当にありがとうございます。

第四話：第六章：デート

霧谷はシンプルな感じの服装で校門へとやって来た。
時間は午前１０時４５分。
予定の時間より１５分早い。
しかし、舞は既に校門に来ていた。
高校で見るのとは全然違う姿。
薄く化粧をして、少し大人っぽく見せている。
「舞ちゃん」と霧谷が声をかけるより早く、舞は霧谷に気がついた。
霧谷の顔を見ると、頬を少し赤らめて会釈をする。
「おはよ、それじゃ行こうか」
「あ、はい」
舞が消えそうなくらい小さな声を発すると、二人は横に並んでゆっくりと歩き出した。
「……あの、今日はどこに行くんですか？」
恥ずかしいのか緊張しているのか、あまり顔を合わせようとしない舞。
霧谷は、そんな舞を笑顔で見ながら返答をする。
「遊園地。ありきたりだけどいいかな？」
「はい、全然大丈夫ですよ。でも、近くに遊園地なんてありましたっけ？」
「ああ、最近出来たばっかりなんだよ。ちょっと電車に乗るけど、そんなに遠くないから大丈夫」
ぎこちない笑みを浮かべている舞。
そのぎこちなさは周りの誰が見ても一目で、緊張してるんだな、と判るほどだ。
それから遊園地に着くまでの約三十分間、霧谷は舞の緊張をほぐすために、いろいろな話をした。
部活の話、成績の話、学校での話。

つまらない話だったかもしれないが、それでも舞の緊張をほぐすには十分だったらしい。
少しずつだが、舞の笑顔は自然なものになっていった。
「ここ……ですか？」
遊園地に着いたとき、舞はそう言った。
というのも、外から見た限りでは舞の苦手な絶叫マシンが多数見えたからである。
「うん、そうだよ。……あ、苦手なのはある？絶叫マシンとかさ」
不安気な舞の表情を見て聞いてきた霧谷。
舞は、霧谷が絶叫マシン好きだったら悪いという理由から、本音とは正反対の言葉を言っていた。
「え……っと……その……大丈夫……です」
「そっか、それならいいんだけど……あ、チケットは俺が買うから」
「そ、それはダメです！……哲也先輩に悪いですよ」
思わず叫んでしまい、その恥ずかしさからか、舞は真っ赤になりながら最後に消えそうな声で本音を付け足した。
霧谷はクスッと笑うが、それ以上は何も言わずに一人でチケット売り場へと向かった。
「大人のフリーパス二枚下さい」
「５４００円になります」
「え……ちょ、ちょっと哲也先輩」
霧谷が何をしようとしているのか舞はやっと気がついたが、もう遅かった。
霧谷は片手にチケットを二枚持って戻ってきたのだ。
「はい、これ舞ちゃんの」
言って、そのうち一枚を舞に手渡す。
「す……すいません……」
「いいから、気にしないで。こういう時のためにバイトしてるんださ」

花梨は今、紗英の家にいる。
花梨の目の前では、紗英が隼人を説得（？）していた。
「だーかーらー、そんなん俺がやって何の得になんねん！」
「そんなんやから彼女出来ひんねん！とりあえずたまには黙って私の言うこと聞き」
「最終的に暴力で従わせる女が何を……わかった、すまん。わかったからさり気ない仕草でハンドガン取り出すの止めんか！
……はぁ……でもどうもやる気になれんわ……せめて教える代わりに花梨ちゃんが俺と――」
パシュ
気の抜けるような音がした。
紗英がハンドガンで隼人の足下を撃ったのだ。
どうもサイレンサーをつけていたらしく、花梨はすぐには撃ったことに気がつかなかった。
「は……発言権まで奪うか？普通」
「う・る・さ・い。変なこと言ったりやったりしたら即しばくしな？花梨ちゃん、変なことされそうになったら私に連絡してや。
男の脳内なんてエロイことばっかやねんから……あ、護身用にハンドガン持っとく？」
冗談なのか冗談じゃないのか判別がつかない花梨は、とりあえず断ることにした。
「いや、いいです。使い方判らないし、犯罪だし……」
「そう？使い方やったら教えてあげるのに。それに、犯罪なんてばれなきゃいいねん、ばれなきゃ。
まあ持ってなくても、極力この馬鹿からは護ってあげるし安心してな？」
「えっと……さり気なくもの凄い発言があった気がするけど……ありがとうございます」
今更ながら、かなりの不安感を感じ始めた花梨だった。

第四話：第七章：謝罪とお礼

舞は極力変なことをしないようにしたが、結論から言うと舞はデートは失敗だと思っていた。
ジェットコースターに誘われたとき、うまく断れずに乗ってしまい、涙と悲鳴をまき散らしたのはみっともなかったし、汚名を返上しようと無理して自分からお化け屋敷に入り、あまりの怖さに涙を流しながら、霧谷の腕にずっとしがみついていたのは情けなかったからだ。
せめてもの救いは自分の昼食代だけでも自分で出せたことくらいだろう。
デートのことを振り返りつつ、舞は溜息をついた。
もうすぐ霧谷と別れる頃なのだけれど、どうにも話が弾まないからだ。
「あ、舞ちゃん。俺はここからちょっと寄り道してから帰るから」
突然霧谷が告げたのは、ここでお別れという意味の言葉。
そろそろと頭では判ってはいた。
だが、舞は名残惜しさと霧谷への申し訳なさから、さよならとは言わなかった。
「そ……そうですか……あの、哲也先輩。今日はいろいろとすみませんでした」
言ったのは謝罪の言葉。
そして、返ってきたのは舞が全く予想だにしない言葉だった。
「どうして謝るの？」
「え……だってチケット買って頂きましたし……ジェットコースターとかお化け屋敷とかで迷惑かけましたし……」
目を点にして答える舞に、霧谷はクスッと笑いかける。
「もう、チケットのことは気にしないでいいって。俺が買いたくて買ったんだから、ね？

それに、ジェットコースターとかお化け屋敷でのことも気にしてないし、迷惑だなんて思ってないよ。
だから、謝らないで。
んー、そうだな……相手が何も気にしてない時は、むしろありがとうって言って欲しいかな」
「……ええと、それじゃあ……今日は本当にありがとうございました。楽しかったです」
「いえいえ、こちらこそ。楽しんでもらえたなら良かったよ。
それじゃ、バイバイ。明後日また学校で」
「あ、はい。さようなら……」
手を軽く舞の方に振りながら、ゆっくりと去っていく霧谷の背中に向かって、
舞はしばらくお辞儀をしていた。

「ハッキリ言って、『力』は理屈よりは練習して慣れた方がいいねん。
まあ、どうせ『力』を使うのに必要なんは意志・イメージ・集中力くらいやし、何回もやった方が楽やわ。てわけで、これを見てみ」
言って、隼人は一本のろうそくに火をつけた。
何の変哲もない火のついたろうそくだ。
小さな火は時折ゆらゆら危なげに揺れつつ、ろうそくを少しずつ溶かしていく。
「そのろうそくについてる火をよく見て、同じものを頭の中でイメージしてみ？
イメージが出来れば、次は自分の掌にその火を生み出す、という明確な意志を持つねん。
曖昧やとあかんから注意してな。それから掌に火が出たら、今度はそれに集中をする。
そうすれば、その火は掌で消えずに維持されるはずやから」
花梨は説明を聞いた後、軽く頷いて目を閉じた。

頭の中で隼人の説明を思い出しつつ、さっき見せられた火と同じ火をイメージする。
そして、次は意志。
(掌に火を生み出す……)
少し待って、目を開ける。
掌には——何もなかった。
(一度で成功するわけないわよね……)
さり気なく自己弁護のようなことをしつつ、花梨は再度目を閉じる。
(掌に火を生み出す、掌に火を生み出す、掌に火を生み出す……)
そして流れ星に向かって言うかのように、花梨は心の中で三回連続で同じ言葉を唱えた。
今度も少し待って、ゆっくりと目を開ける。
だが、掌には何もない。
「隼人君……何も出ないんだけど……」
頬を膨らませて言う花梨に、隼人は苦笑いをした。
「それは意志が足りひんねんて。悪いけど、ここは今のアドバイス以外はできひんわ。
意志の持ち方なんて人によっていろいろあるから、
下手なアドバイスは先入観を持たせることになって逆効果やねん。
とりあえず、そのくらいの小さな火が出せないと論外やし、頑張ってな」

第四話：第八章：準備完了

「さて……ここくらいでいいか。出てこい、コソコソと人の後をつけるなんて悪趣味だぞ」
舞と別れた後、人目につかない橋の下に来た霧谷はこう言った。
「別にコソコソはしてないよー、ホントにコソコソしてたら哲也兄ちゃんでも僕の存在に気がつかないって」
いつもなら返事は蝿から聞こえる。
しかし、今日は違った。
霧谷の前に姿を現して返事をしたのは、十歳かそこらの幼い少年。
髪は鮮やかなブラウンで、目も髪と同じ色をしている。
一見ただの無邪気な少年にしか見えないが、今まで蝿を操っていたのはこの少年だ。
「それで、何の用だ？」
「うん。あの自然現象のことなんだけどねー、明日の朝みたいなんだー。
だから、明日はちゃんとターゲットを呼び出してね。
僕らの準備も出来てるし、妨害はこっちで対処するからさー」
頭の後ろで手を組んで、満面の笑みで用件を伝えてくる。
それはまるで、この計画は確実に成功すると言わんばかりの笑みだった。

「なんつう……でたらめな……」
花梨の掌にある小さな火を見つめつつ、隼人は息を呑んだ。
「ん？何か言った？」
「いや、なんでもない……練習続けて」
疑いの目を隼人に向けながらも、しかし何も言わずに練習に戻る。
そんな花梨の掌を未だ見つめている隼人は、今までの自分の訓練を思い出していた。

通常『力』を扱うには、個人差はあるものの五週間～十週間くらいはかかる。
現に、隼人も六週間はかかった。弾は五週間と少しだったはずだ。
そして、『力』を扱うための訓練は三段階に分かれる。
最初の段階ではひたすら黙想。
しかし、ただの黙想ではない。
周りがどんな状況であっても精神を集中させる訓練なので、先生が様々な妨害をしてくるのだ。
突然オヤジギャグを飛ばしてきたり、楽器を演奏したり、下手な歌を歌ったり、酷いときには耳元で卑猥な話をすることだってあった。
それに耐え続けて、先生がＯＫを出したら次の段階に進めるというものだ。
次の段階ではスナイパーライフルを渡されて、１ｋｍ離れた位置に置いてあるペットボトルを撃ち抜く訓練。
だが、これもただの狙撃訓練ではなかった。
狙撃しやすい地形なのだが、至る所で大規模な台風並の強風が人為的に吹いており、
更に風向きや風の強さがコロコロ変わるというおまけ付き。
当然ながら、生まれて初めて触るスナイパーライフルでペットボトルを撃ち抜けるはずもなく、
実際に撃ち抜けれたのは十数人中三人ほどで、しかもその全てがまぐれ。
唯一もの救いは、合格条件がペットボトルを中心とした半径５０ｃｍの円の中に、三発連続で撃ち込むことだったくらいだ。
これでも十分に難易度は高いのだが、ペットボトルに三発連続で当てるのと比べればまだマシだった。
ちなみに先生曰く、この訓練は忍耐力と集中力、そしてその持続力を鍛えるためのものらしい。
この狙撃訓練に合格をすると、晴れて現在花梨が行っている最終段階の訓練に取りかかれるのだった。

そう、花梨が今しているのは、最終段階の訓練なのだ。
他の訓練を行っていないのは、目的が弾を驚かすことなので、実際に戦闘を行うことがない花梨が集中して『力』を維持する必要はない。という隼人の判断からである。
花梨は今、掌の小さな火を消さないように保っている。
大体五秒くらいで消えてしまっているが、それでも隼人は驚いていた。
隼人が最終段階に要した期間は四週間。
簡単そうに見えて、実は最終段階の難易度が一番高いのだ。
しかも、一度『力』を使えるようになれば後はイメージを大きくしていくだけなので、
難易度はそんなに高くない。
つまり、花梨はたった半日足らずで最終段階のほぼ九割を終えたことになる。
正直、隼人は花梨がこの状態になるまで、五週間ほどはかかると予想していた。
最初の二、三週間では何も出ず、四週目に入ったくらいで火の粉が出れば良い方だろう、と。
だが、その予想は見事に外れた。
「……信じられへん……これが……ピキュリアーなんか」
隼人が呟くと同時、花梨の掌にあった火も消えた。
「ふう……疲れた。どうも集中するのって苦手ねー」
「そしたら今日はここまでにしよか。おつかれさん」
苦笑しながら話しかけてきた花梨に、隼人も苦笑で返す。
「うん、教えてくれてありがと。明日は何時に来ればいいかな？」
「あー、明日な……悪いけど、明日は無しでいいか？ちょっと用事があってな」
額に浮かんだ汗を拭いつつ、花梨は持ってきていたボテジュースをグッと飲み干した。
「そっか、判った。それじゃ来週かな？またねー」

「ん、またなー」
手を振って玄関から出て行った花梨が見えなくなった時、隼人は小さく溜息をついた。
「花梨ちゃんが特別なんやろうけど……なんか自信なくしてまうなあ。
ほんまは用事なんてないねんけど……ボランティアやねんから別に休んでもええやろ」

花梨が自宅に戻ったとき、出迎えたのは弾だった。
「……紗英の家で何をしてたんだ？」
突拍子もなく聞いてくる弾。
「誰がそんなこと……ってそっか、ヘルメスの能力か……」
弾は花梨の位置を確認することは出来ても、花梨が何をしていたかまでは把握出来ていない。
自分の思惑通りに事が進んでいるのを理解して、花梨は思わず笑みを漏らしそうになる――が、何とか無表情を保って
「別に。弾には関係ないでしょ？」
と言った。
「おま――」
トゥルルル・・・・・
電話が鳴った。
あまりのタイミングの悪さに弾は舌打ちをしつつ、受話器を取る。
「はい、もしもし。きの……じゃない、鈴木ですが。……はい、はい。少しお待ち下さい。
花梨、霧谷って人から電話だ」
「先輩から……？なんだろ。もしもし、替わりました……あ、はい……え？舞のことで相談ですか？……はあ、別に構いませんが……判りました。明日の朝、七時半に湖野居橋の下ですね……はい……では明日」
受話器を置き、花梨は溜息をついた。

「どうしたんだ？」
「別に。大したことじゃない……と思うわ」
最後に付け足した言葉は弾に聞こえていなかったらしい。
「じゃあいいけどな……そうだ、飯。まだ食ってないだろ？作っておいたからな」
とだけ言って、弾はさっさと自室に戻っていった。
飯、という言葉に反応して、花梨は焦って時計を見た。
午後八時十二分。
練習に夢中になりすぎていたようで、いつも花梨が夕食を作る時間を一時間以上もオーバーしている。
弾の口ぶりからして、二人が既に自分で作って食べたのは明確だった。
「うわ……弾、智津子さん……ごめんなさい」
その場にいないと判りつつ、花梨は二人に頭を下げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5875a/

炎の支配者　フレイムマスター

2010年10月17日04時38分発行